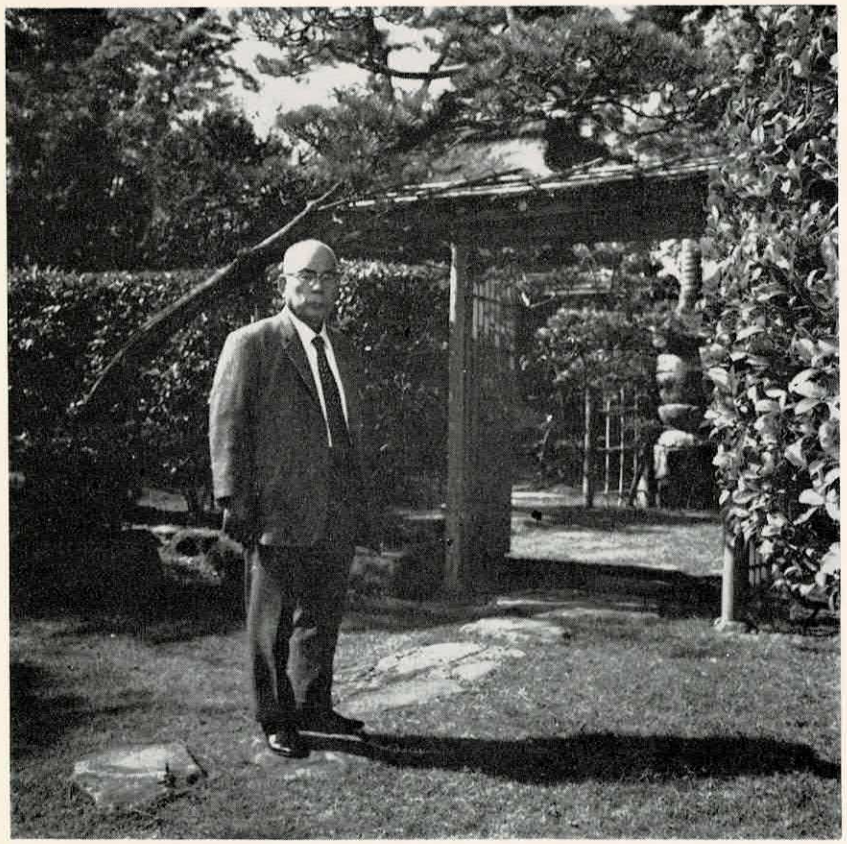
雜草一代

永岡惠

雜草一代 永岡惠



著者近影

目次

生涯を商人として貫き、
暖簾を次の世代に残す私の生き甲斐

第一編　鈴木商店勤務時代……一
私の貴重な人生経験……一

第二編　鈴木商店解散後、
自主経営をした終戦までの時代……四
朝鮮炭業株式会社を設立……四
炭坑を暴徒に襲われる……五
石油商売への転向……六
四十四歳の新兵応召……七
野営、ノミと蚊の攻め苦……九
営々、三十年間の財産を棒にふる……一〇
信義に厚い趙九福君夫妻……一三

私の家族のこと……一三
国威は日の丸に象徴されて……一四
「善隣友好」の新聞記事……一五

第三編　終戦後、今日に至るまで

再起の念と事業の進展……一七
国内での再建事業とその成果……一八
☆永岡鋼業株式会社……二四
☆大分石油株式会社……二七
☆宮崎昭石株式会社……四四
☆現在の自宅買入れの動機……四五
☆大分石油の変革の動機……四六
☆南豊石油株式会社……四七
☆南豊フッコール販売株式会社……四八
☆高田石油株式会社……四八
☆永岡産業株式会社……五三
☆永岡商事株式会社……五五
偉大なる金子直吉翁の足跡……五七
茶道と私……六〇

戦前・戦後の海外旅行……六四

満州・北支行……六四
天津行……六五
北京行……六六
大連行……六七
青島行……六八
上海行……六九
沖縄行……七〇
台湾行……七一
香港、マカオ行……七三
アメリカ行……七四
ロンドン行……八二
パリ行……八三
ローマ行……八四
西独行……八五
コペンハーゲン行……八六

京城行……八七
私の尊敬する人物像……九二
私の結婚、亡妻梅子の事……九八
永岡家の家族構成……一〇〇
私の趣味と道楽……一〇三
老後の生活設計……一〇四

生涯を商人として貫き暖簾を次の世代に残す

私の生き甲斐

そもそも国東半島北海岸の門戸で、周防灘に通じる海岸に近い農漁村を背景とした商業都市・豊後高田市玉津磯町で私は呱々の声をあげた。私の父は、大阪通いの船乗りから朝鮮までを航海する万誠丸の船主であった。近郷では上層階級と目される資産家であったことを少年時代には知らされていたが、長兄が二十歳前後の若輩でありながら、父の実印を自由に使っていろんな事業に手を出して失敗、一家離散という憂き目にあったのが私が十五、六歳の頃でした。

事業に失敗した長兄は、朝鮮釜山で再興を期し、誠商会という海産物問屋を経営することとなり、私を進学させる目的で釜山に呼び寄せられ、私は単身関釜連絡船に乗って釜山

に赴いた。

その後、私を神戸の鈴木商店に入社させることで東奔西走したらしく、私は大正六年、鈴木商店に見習社員として入社が認められ、鈴木商店釜山出張所に現地採用で勤務することになったのが私の実社会での人生のスタートである。

その鈴木商店も、私が入社して八、九年後の昭和二年四月、例の台湾銀行のパニックと共に解散の運命となり、当時二十四歳の若輩で私は自立することになり、その後昭和二十一年まで京城に本店を置き、後述する会社を経営し、莫大な債権と資産を外地に残して祖国日本に引き揚げて再出発を図った。従って私の一生は幼少又は少年時代を省き

第一編　鈴木商店勤務時代。

第二編　鈴木商店解散後、自立経営をした終戦までの時代。

第三編　終戦後、今日に至るまで。

と大きく三つに分類して、私が少年時代から七十二歳の今日まで歩いて来た道を思い出のまま記述して自己反省することも意義ある事ではないかと思えるのである。

第一編　鈴木商店勤務時代

私の貴重な人生経験

大正六年、鈴木商店に入社当時は、見習社員、いわゆる「ボンサン」として入社、それから本採用の試験を受けるため、神戸の本社や大阪の日商等に見習勤務をさせられ、大正八年正式社員となって京城支店に勤務を命ぜられて以来、昭和二年まで約八年間京城支店に勤務したことになる。

まず京城支店ではビール部に所属し、当時サクラビールの販路拡張のため、ずいぶんとおもしろい仕事をさせられた。宣伝のため毎夜のごとく当時のカフェー、飲食店通いである。

「おい、ネエちゃん、ビールくれよ。あ、サクラだよ…なに、サクラ置いてない？サクラビール以外飲めるかい！」

こんな調子である。これこそ正真正銘の「サクラ」である。

このほか、手品師の松旭斎天勝一座に招待するやら、サクラビールの特約店を拡げるなど販路拡張に夜を日についでの大活躍、これが二十歳になるやならずの私の仕事だった。この間、特約店からの手形の回収などで商売の奥義を会得することも出来た。

話を釜山時代に戻すが、釜山は出張所であるため、所長以下四、五人の社員で、そのうえ所長は次々とかわるので、自分で何から何までやらざるを得ない立場にあり、若輩ながら青島、大連方面から輸入する原塩を本船から荷受けして鈴木商店の取引先の製塩所に渡す仕事から、精製された塩を受け取ってウラジオストックに積み出す輸出の手続きから、釜山からロンドンに積み出す間島小麦の受渡しなどを仕事として取組んでいるうちに、シカゴの小麦相場変動などの記録、輸出入の税関手続き、インボイスの作成為替取組みなど貿易業務の仕事をいや応なしに習得させられることとなり、幅広い勉強ができた。

そのかたわら、夜間は釜山商業の第二部である釜山実践商業学校に学ぶなど、公私にわたって猛勉強をさせられたものである。こういったことは鈴木商店が貿易面に飛躍の時代でもあったことに由縁しているもので、さらに鉄道局に対しては、鉄道敷設のレール、枕

木、機関車等契約品の受渡しなど、ありとあらゆる鈴木商店取扱い商品の朝鮮における事業の玄関口として重要ポイントの実務を十八、九歳の時に習得できたのも鈴木商店ならではのことである。大学出身者でも、よくなし得ない実務をよくぞなし得たものと思うとき、これが人生経験の貴重なスタートだったとして、私は今もその当時のことを忘れ得ないでいる。話は、正式社員となって、背広を着てもよい年頃となった京城時代に戻るが、最初のビール部時代から、日本製粉代理店としての小麦粉係にかわり、穀肥の受渡しの仕事をしているうちに鈴木商店が石炭部を開設するに当って石炭係を命ぜられたのが二十一歳の時、石炭の移入販売を担当させられた。

これが後日、鈴木商店解散後の自立の基礎になろうとは当時考えてもいなかった。即ち「咸興炭」といって咸鏡北道の咸興で採掘した帝国炭業の石炭を鈴木商店京城支店で一手販売し、鉄道局に対する売込みや、筑豊炭坑から仕入れて京城で売捌くなど、担当者として恥かしくない業績を上げ得たと思っている。

しかし、隆々日の出の勢いであった鈴木商店も、昭和二年、台湾銀行のパニックによって解散した。鈴木商店の事は城山三郎著『ねずみ』にくわしく記述されている。

第二編　鈴木商店解散後、自主経営をした終戦までの時代

朝鮮炭業株式会社を設立

鈴木商店の解散によって、これまでやって来た石炭の取扱いを引受けることになり、これまで鈴木商店の特約店であった店に事務所を置き、帝国炭業駐在員の名目で自立の基礎つくりができたわけであるが、そのうえに帝国炭業も解散することになったため、咸興の炭坑を私ども関係者で引受けることになり、当時の炭坑に関係のあった私を含む五人の共同出資によって帝国炭業の咸興炭坑の採掘権と炭山全体を引受け、朝鮮炭業株式会社を設立、本社を京城に置き、私は営業経理面を担当することになり、採掘、採炭業務のほかすべての営業を、当時二十五、六歳の私が切りまわしていった。

炭坑を暴徒に襲われる

この頃、梅子をめとって新世帯を京城に持ち、間もなく咸興の炭坑現場に新居を構え、たのしい家庭生活でも、仕事の面でも、正に我が世の春を謳歌する華々しい時代であった。さらに炭坑買収当時の予定残炭量の事業計画から、別途に露天掘りの出来る炭層を発見したため採炭費も安上りで、この時ほど予想外の金儲けの出来たことはなく、当時の利益がその後の私の仕事の資金づくりとなった。また連夜の如く京城の旭町、新町などと花柳界を遊びまわり、一生を通じて最高の道楽の限りを尽したもので、若くして一獲千金の成金となったことが、今さらながら全く夢のような心地がしてならなかった。

好事魔多し―のたとえの如く、そのようなぼろ儲けがいつまでも続く道理がなく、炭坑経営二年くらいにして炭坑を暴徒に襲われ、採炭設備、電気設備一切が破壊され、出資者全員が炭坑を放棄して経営転換を余儀なくされ各出資者にそれぞれ利益の配分を行った。

石油商売への転向

私は、この配分利益金を資金にして石油商売に転向することを心に決め、咸興を引揚げ京城に再び住居を持つことになり、京城市街を眼下一望におさめられる光熙町の高台に、当時としては珍らしい鉄筋地下一階、地上二階のモダン住宅を造り、さらに茶室、朝鮮家屋等も付属建物として造り、ここに生活の本拠を構えた。これが昭和四、五年、私二十七、八歳の時である。

仕事の方は京城黄金町の日本生命ビル三階に事務所を置き、石油販売で東京・小倉石油の朝鮮、満洲、北支方面の販売権を持ち、京城に辰巳鉱油㈱、辰巳物産㈱などの本社をつくるほか元山、清津、新義州、平壌、釜山等に支店を持ち、後には大阪、東京まで出張所を持つほか青島に永岡洋行、京城永登浦に永岡化学工業所（塗料、ローソクの製造）このほか満洲、北支方面まで事業を拡げ、奉天、新京、北京、天津、上海に大元商事の名称で店を持った。

このほか辰巳物産関係では三井物産との取引きで東京芝浦変圧器、モーター、タンガロイ、安川電機のモーター特約店、日本油脂のタセト熔接棒の販売特約店等々、正に永岡コンテェルンの黄金時代を二十代の後期から三十代の全期、四十代の初期にかけて私は全力投球で永岡の事業を築き上げたのである。

自分の仕事以外に朝鮮ローソク工業組合理事長やら朝鮮海上重油販売組合理事長、朝鮮特殊砿油販売㈱取締役、朝鮮化工株式会社取締役など関係した公私の仕事は多岐多様にわたっていた。

四十四歳の新兵応召

昭和二十年の終戦間近い六月、私は四十四歳の新兵として京城で現地召集令状をうけた。四十四歳の老兵を新兵として召集しなければならないような戦争の現状では、とうてい生きて還れる公算はないと信じ、遺言状を書き、事業関係では、当時関係していた会社の専務はじめ幹部、各地の店の責任者を信頼し、後事を託して入隊したものである。

私の入隊した部隊は、物資の調達を第一としているらしく、すでに私のことを調べがついていたと見えて、京城市内や総督府に私の顔が広いということから主計の小川少尉は

「君はこの方面で協力してくれ」ということになって、兵隊としての一切の訓練は全然なし、毎日小川少尉につれられて総督府にタオル、石けん、洗面器、ローソクその他軍隊に必要な雑品類の切符(当時は配給制度のため)をもらってまわることに利用され、あげくの果てには私の会社のトラック、三輪車まで軍に提供させられたが、それだけではなく、入隊前、私が愛用していたドイツ製の高級車まで徴用される始末で、こうした物質面での役に使われ、兵隊としての訓練を受けられぬため、部隊に帰れば銃の手入れなどの軍事訓練ができていないため古兵、上等兵、下士官からこっぴどくやっつけられるやらで、二、三回は手ひどいビンタを喰らったこともあり、兵隊としてもっとも大事な敬礼の教育もろくろく受けていなかったため大失敗をやらかしたこともあった。

こうしたことから小川少尉の配慮もあって酒保に配属されることになり一般兵としての教育は全く受けないままに、間もなく京城の部隊から離れて南朝鮮の田舎、三千浦という所に移動することになり、野戦部隊として、山林の中でのテント村のような所での兵隊生活が始まった。

野営、ノミと蚊の攻め苦

京城の兵営で南京虫の夜襲に夜毎悩まされたこともさることながら、ここの夜営では蚊の密集攻撃に満足に眠ることも出来ず、この世ながらの生き地獄の毎夜々々であった。たまたま京城に残して来た妻が、この「蚊地獄」を伝え聞いて蚊帳を送ってくれたが「兵卒がこんなぜいたくなものを使用するとは何事じゃ」ということで上等兵殿に取り上げられて、折角の妻の愛情こもる贈り物も使うことが出来ず、頭と両手に蚊除けの網をクルクル巻きにして、暑くて蒸し風呂のような夜毎を苦しみ続けたものである。

この頃、牛飼いや鶏飼いの世話もやらされた。特にひどかったのは豚の「きんぬき」といって、軍医が豚の「きん玉」にメスを入れて「きん」を抜くのを手伝わされ、わめき叫ぶ豚の両足を強く押さえつけて、さながら地獄の羅卒のような役割をつとめさせられたこともあるが、いま当時のことを思い浮べてみると、四十四歳の老兵は、いったいどんな顔をして豚の両足を押さえつけていたのであろうか、「きん」を抜かれるのにもがき苦しむ豚の表情とどう異っていたのであろうかと思うと、むしろおかしくさえなって来る。

こうして軍隊生活の裏面も、いろいろと知ることが出来たが、なにぶん二十二、三歳の朝鮮兵と同じに扱われるので、このような状態が長く続けば、命がどこまで続くことやらと、内心不安に思っているうちに、八月二十日、終戦の詔勅を伝え聞いたのである。

この時の、いつわりない気持ちは、敗戦の悲憤もさることながら、その後に来るものは「やれやれ」といった解放感で、召集解除と共に、帰還は一等寝台車で帰ったものだ。同じく召集解除で帰る上官に

「おい、永岡、これまでのことを考えて、一等寝台車というのは遠慮してはどうか」

と小言を言われたものの、なんといっても解放感が先に立ち、いわゆる「元上官」の小言など、どこ吹く風、これまでの「苦しさ」に対する見返しもあってか「解放感満喫」の元二等兵「一等寝台車帰還」で京城に引き揚げ、命拾いの思いで待ちわびる家族と再会できたのである。

営々、三十年間の財産を棒にふる

当時の金で壱千四、五百万円に築き上げた大財産を朝鮮の地に残したまま、わずか四十

五万円の金を、第一銀行下関支店の当座振込みにして帰国したものの、これも凍結されて全くの無一文とはこの当時のことで、その後朝鮮の情勢が急変して、私に京城に引返すよう電報を受けたものの渡航許可を得られず、朝鮮での三十年間に近い生活にお別れを告げるやむなきに至ったのである。

その当時、大阪、東京に本拠を構えていたら、私の戦後における事業とか生活設計も変っていたかも知れないが、敗戦による朝鮮の引揚げが私に一つの考え方を与えた。即ち殖民地は樹木の枝葉に等しいもので、如何に枝や葉が繁茂しても、根が悪くなった時は、なにもかも枯れてしまう。朝鮮は殖民地という枝葉であり、日本国は根である私にとっては郷土大分は自分にとっての根であり、すべての根源であると考えた時、何が何でも故郷に根を下すことが人生として最も大切なことだと思って故郷に家族と共に住みつくことにしたのである。

その樹木の根である故郷・豊後高田市で、今は亡き妻の梅子が、喘息を病む母に至れり尽せりの看護孝養をつくすのを見て、私はひそかに手を合わせて感謝していたものである。

信義に厚かった韓国趙九福のこと

朝鮮時代のことをふり返って、時に苦々しく感じるのは「人間の信頼」ということだ。終戦によって私が朝鮮に残した財産処理を委してあった社員から去られ、裏切られたことで、私は人の心の頼りなさというものをしみじみと味わった。

反面、そういった危急存亡の場合、同胞社員からの裏切りとは逆に私の使っていた韓国人社員・趙九福君の、涙の出るような人間味に、私はひどく心を打たれるのである。

趙君夫妻は、私の経営する辰巳物産の社員で、社長である私を親のように慕って、私の写真を自宅に掲げ、今日に至るまで毎年欠かさずに音信を続けており、数年前私が団体旅行団の一人として韓国を訪れたさい、趙一家はもとより、京城辰巳物産時代の社員であった数人と取引先であった開城の張基旭さんらを伴い大勢でソウルの飛行場まで出迎えてくれて、趙君の自宅に私をともない大歓迎をうけたことなど、終世私には忘れられないことで、日本人より、むしろ韓国の人たちの人情の厚さに、私は涙する思いである。其の後趙君の死去を聞き驚いている。

私の家族のこと

朝鮮時代の思い出としては、彼地で生まれたのが長女「恵美子」長男「恵一郎」と二人の子供が続いて生まれたが、以来八、九年間して「康彦」と「栄之」が生まれたが、これは松本産婦人科病院で、妻が診断を受け手当てした結果による二男、三男の授かりで、私はこの時ほど名医の治療というものに感銘を受けたことはない。こうした因縁で「康彦」の名前は松本院長の尊父が漢学者であり、その老先生に命名を願い、その他の子供は私が命名した。「栄之」は私の父が栄之助であったところから「助」だけを除いて「栄之」と命名した。郷里に引掲げてから生れた「邦子」は、母国日本で生れたことを意味しての命名である。

これら五人の子供を養育して来た亡妻梅子の子供らに注ぐ母性愛の深さには、わが妻ながら私は深く頭を垂れる思いで、殊に長男恵一郎がチブスで生死の境をさまよっていた時などは、文字通り寝食を忘れて看病に当る姿には、むしろ神々しいものさへ感じられた。幸い京城大学病院小児科の高井先生のおかげもあって恵一郎の一命はとりとめることが出

来た。

その後大阪で高井先生に再会した時、何年かぶりで改めて昔のお礼を申し述べたような次第で、当時高木先生は日本の代表的な小児科の名医としてテレビなどを通じて一般にも知られていた。

国威は日の丸に象徴されて

外地の思い出をいま一つ。朝鮮と満洲の国境にある豆満江に木橋があって、その橋の真ん中に板戸が造られており、その鍵を日本側と満洲側が一つずつ持っていて税関の役人が通行人のある度に板戸を開けて通していた。これがほんとの国境だなと思ったことが、今なお印象に残っている。

今から考えると、若さという馬力もあったことではあるが、する事なす事すべてが好結果をもたらすという運にも恵まれて、京城から満洲、北支と飛行機で飛び歩くやら、仁川から青島まで三昼夜を費やす汽船の旅、また長崎から上海に向かう時など、日本の国威を象徴して船尾にひるがえる日の丸を見る時、日本汽船が如何に威風堂々と頼もしく感じら

れたことか。この日の丸を仰ぎながら私はしみじみと「租国は強くなければならぬ」という感一入だった。

また上海でも青島でも上陸した場合の税関の荷物検査なども「日本人である」ということによって楽々と通過できるということを考えた時、租国は立派でなければならない、強くなければならないと当時の私はひしひしと感懐にふけったものである。

（註＝編者）永岡社長が朝鮮時代、自分の社員であった朝鮮の人たちを、わが弟の如く、子の如く可愛がって面倒をみていたこと前項の趙君夫妻のことで永岡社長が述べているが、これを裏書するような記事が、昭和四十年十二月二十九日の大分合同新聞に

「善隣友好」の贈りもの

韓国から大分の社長さんに

さっそく〝親善協会〟の構想

という三段見出しで報道されているので次に見出し三だん四だん組みその一部分を引用し

てみる。

〃日韓国交回復を機会に、昔の社長へ親善の揮毫を〃とこのほど韓国の有力な経済人から大分市王子町の大分石油社長永岡恵氏（64）に「善隣友好」と書いたりっぱな揮毫が送られてきた。これを受け取った永岡さんは「昔のことを忘れずに、心のこもったプレゼントを送ってくれた気持ちがうれしい。これからお互い経済人の立ち場で助け合いたい」と大喜び、日韓親善協会みたいな組織をつくって、民間の日韓親善に尽したいと近く在大分県在住の実力者で（当時の）過去に韓国で働いていた有力者たちに呼びかけようとしている。揮毫の贈り主はソウル市西大門区に住む三浪津電力会社副社長の趙成培さん（50）。趙さんは終戦まで永岡さんがソウルで商社を経営していた時の社員で、最近までお互いに消息がわからなかったが、日韓の国交回復を機会に二十年ぶりに趙さんからたよりが届いたもので、揮毫は韓国一流の書家季東鎔氏が筆をとり「貴我両国の国交樹立を記念して」と添え書きし「善隣友好」としるしてある。（以下略）

第三編　終戦後、今日に至るまで

再起の念と事業の進展

引揚げ後の私の事業目標は、朝鮮、満洲、北支で石油商として大をなしてきたことでもあり、日本に帰っても石油商としての再起を図ることを考えたのであるが、一応これを中止して、先ず朝鮮時代に日本に足場の出来ていた鉄関係で再起することにした。戸畑工場に本拠を構え、永岡産業戸畑工場、永岡産業下関店、大阪店、東京店、福岡店にそれぞれ朝鮮時代の社員を配置して再出発のスタートを切ったものの、資金面での苦労は絶えなかった。幸い戸畑工場が日本油脂の協力工場であった関係上、工場には日本油脂の在庫として鎔接棒伸線が七、八十トンあったので、この払下げを受けることにし、当時トン当り八百円くらいの鉄線を千円くらいで買受けることが出来た。

運というものはどこで開けてくるかわからないもので、これが瞬く間に一万円以上に値上がりしたので、この利益と当時三井物産八幡支店で軍管理品の払下げのあることを知り交渉に当った結果、払下げに成功、殊に払下げ品の中に真鋳棒が多量に含まれていたためこの販売利益が相当なもので、こうして日本における再起の資金造りに成功したのである。

国内での再建事業とその成果

資金造りに成功して再建事業に乗り出した訳であるが、その成果というか各会社別の今日までの経緯をみよう。

▽永岡鋼業株式会社（本社・戸畑）
工場＝戸畑、光、大阪、戸畑石油部、戸畑開発部、

▽大分石油株式会社（本社・大分）
支店＝別府、亀川、豊後高田、中津、杵築、佐伯
給油所＝大分市王子町、昭和通り、大道、新日鉄前、東大分、明野団地、工業

団地、別府市海岸通り、鶴見園、佐伯市、杵築市、豊後高田市玉津、新町、中津市、四日市（四日市昭石に貸与）刈田（永岡鋼業に貸与）

▽高田石油株式会社（本社・豊後高田市）
給油所＝呉崎、犬田

▽南豊フッコール販売株式会社（本社・大分市）
支店＝宮崎市
出張所＝豊後高田市

▽南豊石油株式会社（本社・別府市）
給油所＝一カ所

▽延岡昭石株式会社（本社・延岡市）
給油所＝一カ所

▽宮崎昭石株式会社（本社・宮崎市）
給油所＝直営給油所、宮崎市橘通り、花ケ島佐土原

このほか大分石油の投資会社

三重町　平源石油株式会社
都城市　児玉石油有限会社

等これ以外に今は関係はないが大分九石販売株式会社の創立初代社長をつとめるほか、大分運送株式会社も私の創立、その後関係者に譲渡した会社を含めさながら会社創立業みたようなものでこの外九州運送株式会社に大分石油から壱千万円投資して十年近く無配当であり、私が取締役として関係していること、この投資が大分石油として最もなやみのたねとなっている。

以上の会社を創立、そのいずれもが今日隆盛を極めており、今後ますます発展するであろうところの内容と実力をつけており、基礎も安定していることは創立者の私として誠に誇るべきものである。今後は後継者により各社それぞれ一層隆昌発展をこいねがうことが私の生き甲斐でもあり、各社の幹部、従業員共々、創立者である私の苦心と、商人魂とでもいうか、仕事一筋に生き抜いてきた五十数年間にわたる経験と信念が、後に続く人たちにとって何らかの参考になれば――とのみ私はねがっている。

以上永岡コンツエルン各社の創立にいたるいきさつと、僅か二年間ではあったが光商工

会議所会頭を勤めたことなどを次に記す。

光市商工会議所会頭をつとめたのは一期満二ケ年であったと思う。それは当初会頭引請けの条件であったからでもある私が公的の機関である会議所会頭に選ばれてからは自分の性格からして其のことに熱中して本業がお留守になることを憂慮したからでもある。しかし私は会頭時代に最大の仕事をした其の主なるものは会議所事務室の新築および会議室の増設、次に

一、光、下松、徳山、南陽の四地区、即ち周南会議所の合同会議開催を発起してこれを継続して周用地区経済の理解を深めるとともに周用地区会議所連合会をつくることに成功した。現在はどういうことになっているかは知らない。

二、私が大分県でも石油商を手広くしている関係もあり大分が商工都市としての発展途上にあることから光市の如き工業地帯の経済人との交流をなすことが両地の会議所のためには大きく貢献することを考え先ず大分から副会頭二人、外商議員十数人の同意に依り光市に大分の上述の人を招き経済懇談会を催した。続いて大分に光会議所会頭（私）外十数名が工業地帯を見学して経済懇談会を催した。僅か短い期間で

あったが、最善の公的機関の活用に心を傾注したことで短期間ながらよいことをしたと自負している。

なお三十七年二月一日、会議所事務所新築当時の私の挨拶をここに書きそえておく事としよう。

輝かしい新春を迎え本日市長初め来賓各位多数の御臨席のもとに光商工会議所落成式を挙行することができましたことは光市、光市議会並に八幡製鉄、武田薬品、八幡鋼管の三大会社の外会議所役員を初め会員全体及一般市民の絶大なる御支援と御協力に依る結果でありまして衷心より感謝に堪えない次第であります。今回此の会議所の建物が生まれますまでの経過につきましては既に皆様御高承の通りでありますすが、ここにかいつまんで申しますならば光全市民の要望されて来た電報電話公社が一日も早く新時代に即応する施設の実現をはかるため電報電話公社敷地の斡旋が、たまたま住み慣れた古い歴史をもつ商工会議所の用地に白羽の矢がたてられ、これが最適であるとの結論から会議所の移転問題となりこの二つの大きな問題解決には大衆的見地からこれをなさねばならぬことになった次第であります。其の間迂余曲折があり、皆様に種々御配慮を煩しましたがこの土地建物が

会議所の財産として又将来に大きな希望をもつことが出来ましたわけで、これを要約しますならば①電報電話局の急速なる実現が出来た事②会議所として立派な財産をもちこれを後世に引継ぎ出来ること③現在の会議室及事務所が立派に出来上がったこと正に市政にとっても大きなヒットと思われるのであります。これ偏に市長ならびに助役の格別の御高配の賜であるは勿論会議所関係各位にも過分の御負担を御願い申しましたがお赦し願って以上の成果が実を結びましたことを会員各位とともに大きな誇りとして戴きたいと思います。吾々は光市における唯一の経済団体として会議所本来の使命達成は申すに及ばず上述の通り産業経済界に大きく貢献する施策をなすとともに地域発展に力強く寄与なすべき体制は此の建物会議室の落成により一層その責任を痛感すべきと考えられるのであります。どうかこの会議室が手狭となり残されて敷地に近き将来立派な商工会館が建設されることを夢み且つ当会議所が光市経済界全体によりよく利用され皆様の活用が出来ますよう心から念願するものであります。どうか光市が益々発展し光市経済界が大きく飛躍して立派な商工都市になるため会議所が力強く貢献できますよう会員一同を代表して茲に誓をしたいのであります。甚だ不行届でありますが本日の落成式につき皆様に心から感謝の意を

表しますとともに所懐の一端を披瀝して御挨拶にかえる次第であります。

▽永岡鋼業株式会社

この会社の前身は前述のように戸畑市金原町に本社事務所を置いた京城辰巳物産㈱戸畑工場（私個人全株所有）であったもので、戦後永岡産業戸畑工場として名称変更の上発足した。当時手塗りの熔接工場として、戦時中の工場を管理していた南芳雄君（義弟）と南徳雄君、それに女子従業員数人と瓦斯棒の生産ということでスタートした。当事女子事務員として入社した大塚嬢が、現在なお元気に勤務しており、唯一の永年勤続者でもある。

当時は戦後経済の変動期ではあったが、戦時中の統制経済の延長として、原材料は割当制度であったところから九州熔接棒工業組合を設立し、私自ら主要役員として大阪、東京、九州の三組合の合同会議で、全国的な割当制度による熔接棒の生産販売を行うことになったもので、当時からのおつき合いである山瀬氏は、いまなお業界で活躍しておられる。

その後、割当制による熔接棒原線は、当社が量的に優位の立場にあるところから、福知山市の授産事業として熔接工場を、前海軍時代の人たちが、海軍の疎開機械で熔接棒の製造を始めることになり、その原線を月十トンほど回してくれないかとの申し入れが日本油

脂時代から日本熔接棒の草分け山崎卯一氏を通じて私の方に話があったので、これを快く受諾したことからその恩義に酬いるため熔接棒制品の一手販売を私にやってもらいたいという話もあって、大阪の永岡産業が今日の熔接棒の販売を行うことになったのである。

この当時知り合った福知山市の前川、大槻両氏らの紹介により、当社で新潟鉄工所の自働塗装機を買入れることになり、新潟に私自身二、三回出向いて塗装機を戸畑工場に据付けることに成功した。

この間、前川氏の紹介で、旧海軍の熔接棒製造の権威者である山上構氏を迎え入れることによって、当社の熔接棒の生産は飛躍の一途をたどり、当時O.Sのマークによる割安熔接棒が全国的に売り拡められていった。

こうなると金原町工場だけでは狭隘になってきて、昔汐井崎という町名であった現在の本社工場所在地を、以前木材工場であった工場を買収し、ここに熔接棒の伸線から塗装までの一貫作業のできる工場を発足させて、迂余曲折ののち今日に至っているのである。

この間、山上氏が日本でも有数の技術者であったことから、旧海軍時代の上司のあっせんにより川崎製鉄の西山社長に見込まれてスカウトされ、川崎製鉄の千葉製鉄所内に山上

氏が責任者として熔接工場が開設されたのであるが、山上氏の後任として同氏の推薦によって釜野氏が当社に入社し技術の補強を図ることにしたのであるが、山上氏が被覆棒生産研究の権威者であったのに反して釜野氏は、経営、性格、手腕の面で劣り、あれだけ隆昌をたどっていた熔接棒の生産は減少の一途をたどる状態となった。この時ほど、自分が技術者でない工場経営が如何に不利であるかを思い知らされたのである。

この当時、伸線工場も建設したため、条件つきで協力を求めた大町氏は、利己主義の強い男で、この人との関係を断ったため並たいていでない苦労をさせられたが、このことを後日、同様に苦労させられた事を戸畑製釘の本田氏から聞くに及んで、なるほどとうなずける数々があり、人を雇用する場合は、十分前歴等を調査して慎重を期しなければならないという切実な教訓ともなった。

この大町氏以外にも、縁故で雇傭した者のため、さんざん苦労させられたり、被害を受けたり、使いこみまたは不良貸倒れをつくられたり数限りない失敗をこうむっており、これらのことは自分でもよく反省していながら人を信頼することで、毎々自分を中心にした物の考え方から、ひとにもそんな不信はないと考えていたため、いわゆる人を警戒すると

いうことをしなかったための欠点であったとしみじみ考えさせられるのである。

さて戸畑工場は山上氏を迎えたことによって自社製フラックスの製造が可能になっていたものの、それ以前大阪亀甲町にあった熔接棒メーカーとのフラックスの取引の縁故から大阪の工場を買収することになり、その初代工場長として釜野氏を赴任させた。買収後わずか二、三年にして火災にあったが、事務所を半焼した程度ですんだのは不幸中の幸いであった。

いまの大阪工場はその後に新築されたもので、当時、三井物産の塩冶支店長はじめ関係者多数を招いて新築祝いをしたことは今なお記憶に残っている。

さて、当時O.Sマークの弊社熔接棒が大阪、東京市場で好評をもって迎えられていたことから、東京に出張所を設けることになり、取引先のあとをうけて現取締役の高橋氏が初代所長となり、その後川崎に熔接作業工場をつくるなど、かれこれと東京での事業発展策を講じたが、結局功を奏せず、高橋所長をはじめ河野、水島、福山といった優秀メンバーも東京を引揚げ、最後は水島ただ一人となり、その水島の退社によって現在の駐在員制度になったのである。其の後東京駐在員の必要がなくなり閉鎖した。

先述のように戦後引揚げ、三井物産から海軍の払い下げ物資の処分を引き受けたことなどによって三井物産八幡支店との取引きが開始され、その後八幡物産、室町物産、三井物産と変遷して今日まで三十年近い年月にわたる三井との取引きには因縁浅からぬものがあり、約二十年前、当時八幡製鉄の光製鉄所が光市に開設されるに魁け、光製鉄所の鉄線材料を目当てに同市に弊社工場を開設するため、用地探しに三井物産の末岡氏と出向いたのであるが、当時光製鉄所の藤原課長の紹介で旧海軍光工廠の跡地に小倉製鋼（住友金属の前身）の鉄線を買って釘工場を経営していた東洋鉄線という会社が、閉鎖のままになっていることを聞き、末岡氏と現場を下検分したものの、全く荒廃しきった工場で、建物も傾き、屋根も落ちているという有様であったが、とにかくこれを買収することにして、当時の宝迫工場長と棟近、田熊の三君が主として工場開設の準備を進めたのが今日の光工場で、発足当時よりも漸次敷地を買収して現在二千数百坪の敷地を有する工場となったのである。

この工場で、一番思い出の深いことは、当時私は工場の寮に寝泊りして昼夜の別なく作業の指導監督に当っていた。ある時、激しい台風に襲われ、工場はガタガタ揺れ、屋根瓦

は木の葉のように舞い飛ぶやらで、終夜警戒に当ったのであるが、この時ばかりは光工場が壊滅するのではないかと己れの悲運を嘆いたものであった。

しかし台風一過、夜明けと共に現在の光商工会議所会頭白井氏（開設当時建設を請負ってもらっていた関係）に依頼して直ちに修理改築を行ったが、被害も少く間もなく復旧出来た時は「天未だ我を見捨てず」といった安堵感をおぼえたものである。

その後、宮崎鉄工の連続伸線機を据えつけるやらで軟鋼伸線設備は完備したものの、古い製釘機では生産増も思うにまかせぬところから尼崎の谷阪鉄工所から高速製釘機を買入れるなどして仕事も順調に進み、拡張に次ぐ拡張を続けて行った。

さらに光製鉄所で硬鋼線の生産を行うことになったのに伴い、私の工場でも硬鋼線の線引きを行うため焼鋼炉二基を建設するやら、細物の連伸機を設置して販路を拡張するなど、光工場経営に全力を投入した。

たまたま光製鉄所で硬鉄線の太物二級品の加工のできる工場を建設するようにと当時の製鉄所津田課長から話があった。これをきっかけに、光市には敷地の余力もないところから、いっそのこと大阪に工場を建設することを思い立ち、三井の末岡氏と大阪で何カ所か

の土地の下検分をしたが、頃合いの土地もなく、大阪進出を断念しようとしていた矢先き、三井大阪支店の山中課長から四条畷の東洋製線の旧工場が遊休しており、これに三井の貸金もあるところから肩替りして工場を建設してはどうかとの話があった。

渡りに船とはこのことと、東京の製鉄所斉藤常務（当時販売部長）と津田課長、さらに三井本社の野原鉄鋼部長、大角重役、それに私の五人で話し合いを進めた。その結果、永岡単独では到底出来ることではなく、かつ大阪商人との競争では至難の業ではあるが、三井物産が全面的にバックアップすればよかろうということで四条畷工場の建設にかかることになった。

こうして出来上がった四条畷工場も、経営がうまくいかず、大失敗に終って三井物産に莫大な負債を抱える結果となった。失敗の大きな原因として、当初八幡製鉄が太物二級の線材を処理する目的で建設にかかった工場であるにもかかわらず、製鉄側が硬鉄線の太物の製造に計画変更となると共に二級線材の供給見込みが立たなくなったこと。

次に塩酸洗滌の酸が近くの田畑に浸入して水稲が赤色となり、延々数町歩にわたる稲作を不能にするという公害の問題を起してしまった。このため被害農家の人たちに押しかけ

られて、被害補償の交渉が夜遅くまで続けられるなど、この時ほど困却したことはなく、遂に工場閉鎖か、製造中止かの決意の段階に追い込まれたのである。

この間、三井物産は何回となく東京、大阪、現地八幡の首脳会議を繰り返すなどして、四条畷工場の赤字を、今後を如何にするかについて大阪で会議を開いた。その結果、三井物産から末岡氏を永岡鋼業に専務として送り込み、三井物産の管理によって建直しを図ることに決まり、実質的には四条畷工場は三井物産の経営に移ったのである。

「長いものには巻かれろ」という言葉があるが、私が四条畷工場中止を、文書で正式に三井に申し入れしなかったこと、三井の末岡専務が、経営に対する損失の場合をどうするかという書類を完備させていなかったことなどが「永岡の損失」という形であらわれたことで、これは私の一生を通じての大いなる不覚であった。

法廷で三井と争う――これは信用を第一とする商人としての私のとるべきことではないとして、じっとがまんして、信用、誠実一路、努力の三本の柱を失わないために三井の条件に屈服したのである。

四条畷工場完成について、三十七年四月十五日付鉄鋼経済新報は、工場の全景と工場内

部の写真四枚を入れて「躍進する永岡鋼業、四条畷工場完成、八幡製鉄系、鋼線部門強化へ」という四段見出しで次のようにトップニュースとして扱っている。

八幡製鉄系列の線材加工メーカー永岡鋼業は、関西地区進出と鋼線部門強化のため、昨年九月以来大阪府下四条畷町中野一七四に、鋼線専門の四条畷工場の建設を突貫事業として進めていたが、さる二月初めには一部を可動、十五日にはその第一期建設工事を完成して、五月から本格操業に入ることになった。

八幡製鉄所は光製鉄所の第二線材ミルが昨年末完成、本年はじめから本格操業に入っており、特に同線材ミルは特殊線材の生産を主力としているため、同社としては系列下の特殊線材加工メーカーの強化、拡充を行うことになり、また系列下の普通線加工メーカーに対しても特線部門の増設を行うなど、特殊線材の需要拡大に努めており、この要請に応えて、永岡鋼業は三井物産のバックアップのもとに四条畷に資金約一億円を投じて新工場を建設することになった。

新工場は生駒山系を背に大阪、神戸、京都、中京地区に対しても交通の便のよい、景勝にして地の利を得たところであり、近くにはわが国の忠孝の鑑として有名な楠正行公の

墓所がある。

敷地は一万平方メートル、建家は工場、事務所二階建、延べ百二十平方メートル、焼入工場一千十三平方メートル、洗線工場二百九十六平方メートル、伸線工場八百二十平方メートル、このほか食堂、受電室、試験室、研究室などが完備しており、これらはいずれも東洋金鋼株式会社鉄骨部が、昨年発足以来はじめての大工事として、その技術陣を総動員、全精力を傾注して建設したモデル建築である。』こうした華々しい門出はすべてあだ花となったのである。（以下略）

以後、全社員の努力によって現在の永岡鋼業が再建され、隆々の発展を遂げていることは禍を転じて福とする事に全社一丸となつた事の賜と思うのであります。信用第一としたことによって日鉄ボルテンの委託加工に加えて硬鋼線の生産等、光工場が大きく飛躍し、今後はステンレスの伸線加工に発展が期待されるなど、この際一層技術陣の強化を図り、堅実な発展は現在社長永岡恵一郎の手腕力量と同時に全社員が更に大きく事業の前進を行う事を期待してやみません。私は社長から会長として今日に至っているのである。これからは会長らしい会長として私しなりに永岡鋼業の役にたちたいと思うが、何んといっても

〝事業は和〟の精神と忍耐、それに誠実努力が最も重要であることを重ねて強調し永岡鋼業が二代目社長時代として面目躍如たらん事を祈念するものである。

次に永岡鋼業の石油部についてふれる。当初は昭和石油の特約店窓口として戸畑の石油部開設の動機となったわけであるが、これは永岡が炭坑方面にグリース販売に適当であることからグリースを始めとする昭和石油との取引の糸口ができたわけである。そもそも再び石油商を志したのにはいろいろのエピソードがある。

戦前、朝鮮、満州、北支で大きく石油を取り扱った実績なり私を高く評価していてくれたのは、旧小倉石油時代の人たちであり、その中の一人で小倉石油の技術部長をされ、小倉石油が日石と合併した時点で東亜燃料会社を創立して社長となられた中原延平氏に東京から九州へ帰る列車でばったり会った。

その時中原氏は「君の永年にわたる石油の経験を棄てるのはもったいなくもあり残念に思う。日本石油社長の佐々木弥市氏に私が会うかまたは電話で君のことを話しておくからぜひ佐々木社長に会って日石の特約店をやってはどうか」という懇切な話があった。私はこの中原氏の恩情に応えるべきだと思って、その後上京し、前小倉石油下関出張所長であ

った太田建吉氏と佐々木社長を訪れた。そのとき佐々木社長が「どこで石油商をしたいか」とのことだったので九州関門か大分地区でということを希望する旨の返事をした。これに対し佐々木社長は「しばらく待機していて欲しい、何とか考える。それにしても九州は大阪支店の商権範囲でもあるから私の名刺を持って帰りに大阪に立ち寄ってみては…」というご厚意をいただいて帰りに日石大阪支店長に面会してみた。ところがこの支店長が日石系の社員であり、一面識もない私が小倉系であるための反感かどうか知らないが、その応待たるや全く無礼千万で、この時ほど私は憤慨し、何糞といった感じに駆られたことはない。こういう礼儀をわきまえぬ人間が、日本一といわれた石油会社の社員の中にいるのかと呆れ果てた。第一自分の会社の社長からの紹介による訪問者に対して、社長の紹介を全く無視した態度で私への次の言葉が今でも私の脳裡に焼きつけられたように残っている。

「わが社は慈善事業をやっているわけではない。いかに戦前朝鮮、満州で小倉石油の販売地盤を持っていたからといっても、それは日本では通用しない。現在日石の特約店は全国に行きわたっている。この際新しく特約店をつくる考えはない。ましてや日本に販売地盤のない引揚者に同情的な考えで取引きする考えは全然ない」

と、誠に無礼極まる応待である。其の支店長の名前を記憶してゐないは残念である。この時私は、はっきりと考えさせられた。佐々木日石社長や中原氏の厚意もさることながら、商人は人に依存するという甘い考え方は絶対に持つべきではない、飽くまで自己の力と信念で世に立ち向かうべきであるという一つの教訓を得たのである。

ここにおいて日石関係は諦めたが、中原氏の私に対する善意にはあくまで応えることを心に決め、鉄プラス石油という私の進む道の構想を胸に描きながら、他の石油メーカーとの提携について太田建吉氏に再び相談を持ちかけた。

その結果、昭和石油の早山専務と懇意の人があるのでその人を通じて昭石との話し合いを進めることになり、現在丸善石油の大手特約店になっている千歳商会の笹野社長に紹介され、笹野氏と一緒に早山専務に会うことによって昭石の特約店となり、ここにおいて永岡鉱業石油部の発足をみたのである。初代部長に六尾健一郎を据えた。その後、昭石から日本漁網特約店をも併せて今日に至っている。

（註＝編者）永岡社長が日本石油の特約店になろうとして大阪支店長に面会し「わが社は慈善事業をやっているのではないし、資力の乏しい引揚者に同情的な考えで取引する考えはない」と非礼極まる扱いをうけたことは、よほど腹に据えかねたらしく、全国でも稀にみる存在を示している総合月刊誌「アドバンス大分」46年12月号の「企業と人」⑤大分石油株式会社永岡恵社長の巻でもこのことにふれて、アドバンス大分記者は

故旧忘れうべき、永岡社長の体には石油のにおいがしみこんでいる。まず日本石油にコネをつけようとしたが、大阪支店長に「なんらの地盤のない人間は相手にできず」とあしらわれて憤激。昭和石油と話をつけたのが昭和二十四年であった。大分石油の誕生である。

そして現在直営の給油所二十カ所、その影響下にある店五十、宮崎、福岡県にも進出している。月商一億五千万円、従業員百五十人、配当二割、永岡社長の商魂にすなおに頭を下げよう。

とその根性を讃えている。まことに評し得てむべなるかなである。

▽大分石油株式会社

当初、永岡鋼業石油部として大分県に進出計画を立てたものの、その当時はまだ切符制度の販売で、しかも通産省の営業許可がなければどうにもならなかった。その許可に必要

な条件をそろえるため、とりあえず大分市に事務所と油倉庫、トラックなどの運搬具、その上過去に油取扱いの経験を有する者といった資格審査の対象となるものをそろえることになった。

当時、大分県下には四十七、八軒の既存店があって、営業許可をとるのは至難なことであった。しかし昭和石油の特約店は一軒もなかった時でもあり、かつ当時許可受付けに当っていた通産局大分出張所長は田村事務官で、この人は戸畑の永岡鋼業が鉄線の割当て及び需要家先別の切符をもらっていた頃、八幡通産局の事務官をしていて、その頃からの旧知の間柄であった。

そういったことから特別に便宜を計ってもらうことを働きかけたわけではないが、とに角スムーズに運び、私の名儀で石油販売営業許可の認可が下りた。

この上は本業である永岡鋼業の傍系として発足することに決め、これに地元の有志の参加を求めることとし、昭和石油とも話し合いの上、豊後高田市で旧知の間柄である川辺氏に話しを持ちかけて快諾を得た。一方、大分市で何かの仕事をしていた毛利君、ならびに上田前大分市長の令弟に当る関川真生君が、永岡鋼業の大分駐在員として熔接棒の販売を

してもらっていた関係で実務を見てもらうことになった。このほか朝鮮時代、私が組合長をしていたローソク工業組合の事務局長だった園田君、それに朝鮮時代私の会社に勤めていた草地俊男君が別府で帝鋼の販売をしていて羽振りを利かしていたので同君も一枚加わってもらった上に、昔からの朋友で、戦後大阪の永岡鋼業で働いてもらっていた久武幸男君らの協力も得られることになった。

一方、株主の方は地元の有力者に加わってもらうことがなにかと都合がいいというところから豊後高田市の柴田徳郎氏、北崎氏、大分市では後藤組に応分の株を持ってもらって大分石油株式会社は発足したのである。

営業面では私名儀の許可でもあり、私が社長になるべきであるが、地元の有力者である柴田氏を初代社長とし、私は代表取締役専務としてのスタートであったが、その後間もなく業務遂行上の都合から私が社長となって今日に至っている。

開業当時、私は先ず切符集めをするため、旧知の豊後高田市や香々地町などの機帆船組合に対して重油の売込みから始めた。その頃、姫島の矢筈丸（松原石油）が豊後高田まで来て切符持参で重油を買ってくれることになったので、亡妻の梅子も海岸まで出向いて重油

の積込みに手伝ってくれるなどした内助の功に対しては、今でも頭の下る思いで感謝している。

思えば、当時はまだ重油が主で、揮発油の売込みにはなかなか切符も集まらず、大分石油本社は、後藤組の倉庫を借り受けて事務所らしく改造し、豊後高田支店は益田久々六氏の火薬銃砲店の事務所を借り受けて、ポータブルで揮発油を売る時代が続いた。

その後各社とも給油所の増設に力を注ぐようになり、私は地元である豊後高田に居住している関係上、国東半島全域を商圏内におさめることを目指し、高田新町給油所から副販をつくることに努め、現在大分県下に五十有余カ所のサブ店を持つに至ったのである。

大分石油創業間もなくの頃、かつて朝鮮時代に辰巳物産の専務をしていた豊浦氏が、郷里国東と別府で何かの事業をしていたが、これに失敗して私を頼って訪れ、私の下で働きたいと再三の懇望があったので願いを入れて採用した。最初は塗料部門でもつくってその方の仕事をしてもらうつもりでいたのであるが、豊浦氏がかつて永年にわたる油屋の経験者でもあり、副販つくりや販売面での手腕家であるところから営業を担当させることにし毛利氏を総務担当、今川氏を豊浦氏の代理に、石油商業組合の系列理事にも私の代りに豊

浦氏を送り込み、高田支店長には川辺氏といったふうに大分石油創立期としては、人的にみて何不自由なく大きく飛躍の歩を踏み出した時代だと思っている。

その間、宮崎の富士石油の倒産により、当時の昭和石油所長北氏との話し合いによって昭石本社の諒解も取りつけ、わが社の宮崎支店として富士石油の業務を引継ぐことになった。と同時に宮崎における副販も、従来の富士商事との関係から児玉石油、渡辺石油等はそのまま第三者として取引きを継続することとし、児玉石油に対してはそのSSとしての土地買収、SS建設の資金を要するため、この資金手当の銀行借入れの保証を大分石油することを条件として児玉石油の株式は折半出資として現在に至っている。

これも言わしてもらえば、私の決断によるものであり、今日児玉石油が隆盛の一途をたどっていることは、私として限りなく慶ばしいことの一つである。

その後、寿石油、岡崎石油、延岡高橋商店、延岡昭石、延岡内田石油店等、いずれも今日順調な歩みを続け、日々発展の一途をたどっている。

それにしても岡崎石油との取引き開始で痛感させられるのは、人間は世の中で、どこでどんな縁故があるか判らないということである。俗にいう〝悪いことは出来ないもの〟とい

うことで、私が常にいうところの、人は人を裏切ったり、その人柄で人から悪評を受けたりするような背信行為があってはならないということで、自分はいつ如何なる場合でも、俯仰天地に恥じることなき生涯を貫き通す信条を持ちたいものだということである。その生きた実例として次のことにふれてみたい。

岡崎石油との取引きで岡崎氏が、当社の宮崎支店顧問である吉田氏を同伴して取引きの話を持ち込んで来た裏面には、当時、宮崎県下でも政財界で幅を利かしていた県議会議員で、政友会の旗頭格であった江川長三郎氏（故人）の縁故者が、岡崎石油の給油所をつくる土地の裏にりっぱな邸宅を構えていた関係で岡崎氏と江川氏が懇意であった。

そこで岡崎氏が「私は石油商を営みたいのだが、昭和石油関係の大分の永岡という男が社長をしている大分石油と取引きしたい、どんなものだろうか」という相談を江川氏に持ちかけた。

ところが江川氏は言下に「大分石油の永岡なら絶対信頼していい。この男の指導の下に商売すれば大丈夫だ。私も三菱石油の特約店をしているので、あんたと取引きしたいのが商売人として本来の気持ちであるが、この際、永岡との取引きをすることをすすめる」と

いったということを私は後日聞かされた。こういったことで岡崎石油との取引きが始まったのであるが、この江川氏と私との因縁は浅からぬものがあったのである。

この江川氏は、私が終戦引揚げ後探し求めていた人で、この人の叔父に当る柏田忠蔵氏が、私の鈴木商店釜山出張所勤務時代の二代目の所長で、僅か二、三年の間に、所長が五人ほど更迭になった。その間私が何も彼もさせられたということは鈴木商店時代のくだりで述べているが、その柏田所長時代、江川氏は宮崎県の細島が実家であり、尊父が手広く事業されており、鈴木商店とサクラビールや焼酎（ダイヤ）糖粉等の取引きをしていた細島の財閥であった。

その長男である江川長三郎氏（その当時は江川栄之助といっていたが尊父の歿後襲名）が釜山の叔父柏田所長のところに中学の夏休みを利用して遊びに来た時、鈴木商店釜山出張所の私ども社員の寮に二週間ばかり滞在した。私と年輩も同じであったところからすっかり仲良しとなり、さながら百年の知己を得た思いで過ごしたものである。

その江川氏が、幾星霜を過ぎた後までも、私のことを思い出していただいて岡崎氏に推薦してくれたものと思うが、人間悪いことは出来ないと同時に、世間は広いようでも狭い

ものと、つくづく感じさせられた。

この江川、柏田家との交わりはその後続いたが、細島に昭和石油の基地をつくるようになった時、小田原昭石所長と細島に赴いた時、江川氏に土地のことやなにやらで、いろいろとお世話になったものであるが、その江川氏も、いまは逝って亡い。

▽宮崎昭石株式会社

富士石油のあとを引継いだ宮崎支店は順調に経過し、大分石油発展のためにも大きな役割りを果したが、大分と宮崎では市場、人の採用等の関係で事情と条件が異るなどの点から、将来、昭石との連繋を一層深めるため、昭石からの要望もあって、宮崎支店は大分石油から分離することになり、昭和四十八年宮崎昭石株式会社を創立、持株は大分石油が六割強、昭和石油が三割強ということで、昭石の一部資本参加による一名の出向役員を出す条件で、社長は私が当然その職責を全うする意味から有給ではあるが、給料は大分石油に入れることにして現在に至っている。

この宮崎昭石も分離後、佐土原に給油所をA式で新設し、現在直営給油所を宮崎市橘通りと花ケ島の三カ所、貯油所一カ所を持って意欲的な営業活動を続けており、現在では月

商七千万円、やがてこの会社も一億円の売上げ獲得の可能性は十分と見ている。

▽現在の自宅買入れの動機

私は郷土豊後高田市に本拠を構えたが、自宅の敷地が実測で一千坪はあろうかと思うのであるが、登記面では六百八十坪くらいになっている。この土地の買入れについては川辺国広氏のお世話にもなったが、朝鮮時代、金谷範三大将が朝鮮軍司令官をされていた頃、その秘書に安部さんという人がおり、その奥さんが戦前郷里豊後高田に引揚げておられた私の知人で吉原代造さんという人が外務省の嘱託をしていた。（当時は東京在住、以前はハルピン総領事もしていたが今は故人）この人が豊後高田に土地を持っていて「誰かこの土地を生かして使う人があれば譲ってもよい」ということを京城時代に安部さん夫妻から聞いていたので母のため別荘を建てることを思い立って京城から安部さんを通じて東京の吉原さんに申し入れたところ「永岡さんであれば譲ってもよい」ということで譲渡の話がトントン拍子に進んだ。同じく豊後高田出身の在東京馬場さんという司法書士に手続き一切を委託して当時の金一万円で譲り受け現在の自宅を築いたのである。

それに戦時中ではあったが、川辺氏のお世話で、安部棟梁、伊藤さんら名人気質の大工

さんに設計、施工まで一任して母屋の改築から茶室造りまでお願いした。この茶室は今日に至ってもりっぱに方式にかなったものとして使われている。その後茶庭まで造るなど、かなり苦労を重ねた。

▽大分石油の変革の動機

ところで、大分石油が初代社長柴田徳郎氏と取締役北崎氏のスタッフ時代、昭和石油との取引きに個人保証が要求されたさい、両氏がこれを拒む結果となり、両氏の持株を私どもで引取らねばならなくなった。

川辺氏にとって柴田氏は過去に特別の関係もあり、北崎氏も当時土建業界で羽振りを利かせていた時で、骨董品で川辺氏との取引きもあったが、果して永岡側に加わるかどうかまた柴田、北崎氏と行動を共にするかという点は、私にとって最も重大な関心であった。ところが川辺氏は、断固私と行動を共にすることを明確にしたので、両氏の持株を私どもで引取った。もちろん柴田氏の社長のイスは名目上のことであり、改選によって北崎氏とも全く関係がなくなり、以来私が名実共に社長として今日に至っている。

この時の川辺氏が、如何に常識人であり適確な判断の持主であったかについて私は敬服

しているのであるが、こうしたことから私は川辺氏の功績に酬いるため、昭石株で利益を上げた時、川辺氏に退職金を贈る余裕も出来たし、会社の現役としては老年でもあり、後進に道を譲らせることにして、今日においても相談役として、私の良きアドバイサーとして迎えているのである。

こうした川辺氏のような人物が、単に豊後高田市のみに止まらず大分市あたりに進出して副社長なり、専務として活躍してくれるよう機会あるごとに説得を続けたのであるが、このことのみは川辺氏個人の事情から、どうしても快諾を得られなかったことは、私の最も遺憾とするところである。

▽南豊石油株式会社

その後、大分石油の最高人事は、豊浦氏が死去し、毛利氏が独立して事業をやってみたいという要望もあって、南豊石油なるものを日網の特約店として創設、大分石油が全株出資、毛利氏を社長に、私が会長に就任し、その後増資し、取引きの保証は私個人が大分銀行に六百万円限度の個人連帯保証人となって今日に及んでいる。

▽南豊フッコール販売株式会社

これは全額大分石油の出資で取引き担保も大分石油の物件を差し入れ、約六千万円の限度で取引きが行なわれている。芥川常務の独裁。彼も富士興産の信頼を得ているようであるが、将来のことを考え、会社運営に内外の批判を受けるようなこのないようにするとともにいずれかの機会に役員構成も充実し一層の発展を期するよう望んでやまぬ次第であるそれは私が代表取締役社長であって、法的には私の大乗的見地による決裁ということに姿勢を正すと共に、これを貫く社風刷新ということを痛切に感じている。

三重平原石油は全株大分石油の投資であり、平源（旧）に対し昭石のB式もA式(後述)に変更、以前は大分石油の所有として三重平源石油の担保の形式で大分石油名儀であり、経営にはわが社の社員香川勝君を出向させ、代表取締役として経営に当らせているが、今日まで一向に成績が挙がらず、人材不足をかこっている。最近ようやく軌道に乗り業績も向上している。

▽高田石油株式会社

高田石油は、私が大分九石販売株式会社の社長を辞任する時、九石よりの仕入れルート

として残すためと、豊後高田に九石のマークが一つも見当らないところから給油所の建設を思い立ったものである。その後、九石販売が九石マークのスタンドを豊後高田に新設したので、三井物産石油を通じて九石マークの給油所として今日に至っている。

大手商社というか、メーカーというか（大分九石販売は伊藤忠商事の資本下にある）これくらい無節操と、圧力で仕事をするやり方は今に始まったことではない。

その後、豊後高田市には日石マークの給油所がないしいずれはその進出が予想されるので、日石伊藤忠と折衝の結果、豊後高田市と宇佐市の境界の国道筋に現在の日石大田給油所を建設したのであるが、なんといっても豊後高田では昭石マークによる大分石油の店舗が多いので、高田石油としては細々と経営を続けている。やがて私の老後の仕事としてりっぱな会社に仕上げたいと願っている。

この会社の資本構成は、大分石油が半額で、永岡恵十分の三、永岡康彦十分の一、川辺国広十分の一、僅か百万円の資本金であるが、大分石油と日石伊藤忠よりの借入れ金で賄っており、月々借入れ金の返済をしている。

永年にわたって苦労を続けて来た刈田出張所も、日産自動車工場が刈田に建設され、将

来の発展は火を瞭るより明かであるのに、これを永岡鋼業に賃貸ししたのは、刈田は三井物産の仕入れルートであり、将来は三井物産石敗を背景として商権の拡張を図ることが有利であると考えたからである。

永岡鋼業と三井とのつながりは、鉄を通じて数十年間にわたる深い因縁と、濃い取引きが続いている関係から、永岡鋼業の鉄関係の仕事も刈田に足場を持って商権の拡大を図るのが大分石油よりまさると考えたからである。

業界でも一般社会でも、大分石油は昭石オンリーのイメージが強く、このため三井との折衝にも不利な点が多く、かつまた人的交流面でも、刈田と戸畑であれば目と鼻の間であり、商売の決裁スピードの点、書類整理の点等で同じ永岡グループという大乗的見地からすれば、永岡鋼業に経営を委譲することが有利である。これによって賃貸借料と仕入れに対し二分の口銭が大分石油の収入源となることによって共存共栄の実を挙げ、大分石油もよくなり、永岡鋼業もよりよい結果をもたらす結果を期待してのことである。

また四日市出張所を四日市昭石として、わが社の元社員城秋一君に賃貸借というより使用料として貸したことについては、古参社員が後進に道を譲る分野を開くと共に、前途に

希望を持たせるため、会社と退職古参社員の共存共栄の基本方針の成果を求めることが最大の目的である。

最後に、私の生存中ぜひ解決しておきたい大分石油の問題点として、昭石との給油所問題がある。当社と昭石の間には

A式＝土地建物すべてが昭石の所有で、内部設備、什器、備品は大分石油所有。

B式＝土地は大分石油、給油所建物、タンク、計量什器上物設備は昭和石油の投資所有で、当社との間は貸借関係にある。

C式＝土地、上物給油所設備とも大分石油のもの。

以上の三方式がとられている。A、C方式は問題ないとしても、B式の場合は、近来の如く地価高騰の折柄、採算が問題になる。土地担保で銀行その他から融資を受ける場合の上物が第三者である場合の評価基準を安くされることにより金融力に大分石油としては大きなマイナスであること。

施設に対する自主的なアイデアは改築が自由に行なわれる点、不利なことが多々あるので、私の持論としては、B式の昭石施設を特約店に払下げを受け、C式とA式の二本建て

とし、所有権を明確化することによって、将来に紛争の種を残すことのなきようにすること。

このため昭石よりB式については念書を入れてもらっていることでもあり、私は老齢故在任中にこのことだけは是非解決して、後継者に経営上の問題点を残さないようにしたいものと考えて、昭石に正式文書で申し入れることを考えている。

次に鶴見園で起こった火災は、弊社元従業員南雅昭の工事中の過失によるものとの理由により、鶴見園が富士火災、東京火災より受取った保険金一億五千万円の支払いを使用責任者として当社で負担すべきであるとの訴訟が提起されていることである。この件については郷土出身の安田幹太弁護士にすべてを依頼し、一切の費用を含めて特別に弁護してもらうことにし、手付金を払っているが、果して本件がどういう結末をもたらすかは大分石油にとって重大問題であり有利解決を祈念するものである。鶴見園からは当時の社長から代位弁償は富士火災から絶体させぬ事で口頭約束もしてあり、鶴見園からも保険に関する責任は一切当社に迷惑をかけぬと云ふ書類は取つて、鶴見園とは円満解決したのであるが故、常儀的に富士火災の損害要求は納得しかねるのである。

▽永岡産業株式会社

永岡産業の前身は、永岡鋼業同様私が戦前の朝鮮における辰巳物産時代を含めて特に因縁浅からぬものがある。大阪堀江に溶接材料商として永岡系グループの根拠地をなしていた辰巳物産大阪出張所が戦災に遭った上に当時の所長であった石上君が召集され、その後任として柴田某を任命して終戦を迎えた。しかしこの男は自分で独立する野心もあって私の仕事に協力しようとしなかった。

戦後、事務所を大阪駅前の永楽町に借り受けて看板をあげたが、ある事情でここを立ち退き阿部野の本通りの戦災を受けなかった場所で小売りのきく店を借り受け電気コンロから日用品の商売を始めた。しかし昔の社員はほとんどがこちらに資本力がないとみて寄りつかなかった。この時にただ一人、Mなる人物が何くれとなく動いてくれ、堀江の火災保険証券から第一銀行の預金証書、会社の帳簿等一活して名古屋に疎開して保管してくれていた。その上永楽町の自分の家が戦災にかかったのもかえりみず阿辺野の店で献身的に協力してくれたことは大阪の永岡産業再起に大きな役割を果した事は一般に記憶に残って居らず余り此の事を知ってゐる人も殆んどないが私としては此の恩義に報いる事は大切な事

と思ってゐる。永岡産業の再起原動力であった事を特に想起すべきである。

かれこれするうちに辰巳物産時代の石井君が引揚げて来て私の仕事を手伝ってくれたことによって大阪における永岡産業大阪店としての足がかりが出来た。この頃の大阪は交通の便は悪く、阿辺野から大正橋まで、寺町、上本町六丁目などを通って石井君の自転車の荷台に乗ってあちこちと飛びまわったことなどが思い出される。

阿部野時代に、大阪の駅近くで熔接棒や熔接材料を売るのに適当な店を探して東奔西走していた時、Mなる人の連絡で同心町に店を借りられることになり、ここに初めて永岡産業としての熔接棒販売の店舗が出来た。

これと時を同じくして東京店の再建にもとりかかるべく上京させた前辰巳物産所長の宮敬三が行方をくらまし、その後私の前に姿を現わさなかった。噂によると自分でモーターの商売をどこかでやっているとのことだが、この男は昔、京城で目立に勤めていたが辰巳に入社、彼の妹の結婚の世話からいろいろと個人的にも面倒をみてきたものだが、こういう道義をわきまえぬ男にも困ったものである。

このため東京出張所は物的の面で動きがとれなくなった。たまたま村田という旧社員と

斉藤女子事務員が東京三田の裏通りで店をしていたので、ここを足場として、村岡君も呼び寄せ私の仕事を手伝わせることによって事業を軌道に乗せることにした。しかしこの村田という男はデタラメで、しかも斉藤事務員といい仲のようで、村岡君との協調が得らぬところからやむなく同君は東京を引揚げさせ大阪の永岡産業の仕事を任せることにした。永岡産業はそれから右よ曲折永年の経過を経て二、三年前より、その後同心町から現在の天満橋に店舗を移転し、永岡側半数、村岡側半数の折半出資によって増資、永岡恵一郎が取締役として永岡側を代表して村岡君の相談相手になっている。

▽永岡商事株式会社

戦前から辰巳物産下の店として小石という男を留守番役として細々経営させていたのであるが、亡妻の弟、つまり私の義弟に当る河崎君が引揚げて来たことにより、この店を継がせ、永岡商事株式会社として昭和二十三年、当時の金五十万円の資本で発足させた。従って今日では莫大な業績をあげておらねばならない筈であるが、私が多忙のためほとんど河崎君に任せきりであったこともあって思うにまかせぬ結果となっている。

この店も朝鮮時代の日本油脂との関係から塗料および熔接棒、それに度量衡の販売等で

今日に至っているが、最近では漸く業績も向上線をたどりつつあるようで、河崎君にも半分の株を持たせることが亡妻に対する供養とも考えて近く増資することにしている。永岡家と河崎家は、今後一族相携えて仲好くこの会社を発展させてゆく事が両家ため及亡妻の意に添い亡妻のよき供養ともなる事と思っている。

永岡産業は昭和二十二年七月二十一日に、永岡商事は昭和二十三年三月十日の創立となっているが、この両社とも前身は、戦後の苦難期に個人経営で発足して茨の道を乗り越えて来たのである。その後朝鮮時代から因縁のある人たちをも交えて会社組織とし、それぞれ代表者が経営に当って来たのであるが、その経営は実務に当るものが主権を握り、創立者であり、全額出資者でもあった私に対する待遇はそれほど重視されず、むしろ無視された形にあったが、最終的には株を実務者と創立者側で折半出資することによって今日に至っている。此の基本と永岡名の社名は将来もかえて貰いたくない。この点、実務者にはそれなりの理由もあり、考え方もあろうが、打って一丸となり、人の〝和〟によって今後これらの会社をますます発展させ、永岡の名称が永久的であり、それによって対外的信用を確保し、それぞれの株主に報いるようになることを期待している。

私の個人的な立場から考える時、こちらが道義的にものを考えても、それが相手に通じない場合は、こちらには割り切れぬものがあるので、自分の手の届かない範囲の仕事には当初の時点で十分考慮し、投資をしないことがもっとも賢明ではないかとも考えられるしこれは反省の良きケースであるとともに、経営学的にみても尊ひ教訓であると思う。

偉大なる金子直吉翁の足跡

鈴木商店と台湾銀行

この二つの会社について思い出されることは、私の鈴木商店時代、当時の金で資本金八千万円のその大会社が、政争のまきぞえということもあったであろうし、また新興貿易商として日本の事業界で急激に抬頭発展したことに対する業界の妬みも加わったであろうしまた社内における大学出と小僧上がりというあつれきにも加えて会社の事業内容があまりにも多岐多様にわたったための統制の不徹底などもあって潰え行った台湾銀行と運命を共にしたことである。

当時、私はまだ二十四、五才の若輩であり、この鈴木商店倒産の実態は把握し得なかっ

たが、後日、小説あるいは文献によって知り得たのである。

当時の鈴木商店の社長は、女傑の名も高い鈴木よね刀自(私どもお家さんと呼んでいた)の下に大番頭（専務）金子直吉翁および柳田富士松翁その他幹部職員が、最終まで女性の鈴木よね社長を社長として仰ぎ、金子直吉翁は、あくまでも専務として終始し、あくまで「鈴木家の鈴木商店」として鈴木家を尊重した。

金子直吉翁の実力は、日本の経済界で高く評価され、今日に至っては死後の金子翁を一層偉大さが再確認されている。鈴木解散後に残された事業として「金子死しても事業は残る」とでも云おうか、即ち帝人、神戸製鋼、日商岩井、日本発条、神戸電機、神鋼商事、太陽産業等々、枚挙にいとまない。残存企業が鈴木から離れた事業の数々が、さらにまた鈴木出身者が現在の日本実業界のトップメンバーに続出していることは、鈴木精神ともいうものが血流として残っていると見るべきで、現存者のみで「たつみ」という会をつくり、月刊誌まで発行されている。

私は鈴木から離れた独立後に、鈴木が昔、辰巳のマーク、即ち暖簾と辰己屋といった時代もあったことも聞かされていたので、辰巳の屋号で、国内でも東京、大阪、戸畑、下関

福岡等、戦前から辰巳物産の社名で業界にも親しまれていたのである。

こういった理念に基いて、永岡産業、永岡商事は、現在では私の許を離れているが、「永岡」の社名は永久に残してなお一層の隆昌発展を図り、創業者の意志が、いつでも、いつまでも生かされることを期待してやまないのである。

永岡鋼業は名実共に永岡一族の事業として新社長の手腕が衆望に応えて、創立者を第一期とすれば、今日は二代目の時代として、事業も内容も時代の波によって変更することがあろうとも、一段と飛躍を遂げて日本経済界に貢献するよう、私の執念として魂を打込みたいと思っている。商魂の精神を全社浸透する事を更に祈念する

私が更に反省というか、共同事業ということで思い知らされていることが身近にある。二男康彦の嫁の実家である中津の元重家は、戦後僅かの資本で発足したものであるが、松本専務の手腕力量の賜で、今日では資本金五千万円の会社に成長し、五、六億円を投資して九州一の大家具商「中津家具」として更に発展が期待されている。株は元重家で全株所有されているが、元重氏が社長を辞めて会長となり、松本専務に対し社長就任方を話しても松本氏はこれを固辞し、むしろ社長夫人を社長にすべきであると進言したということを

聞いている。謙譲の美徳というか、近頃もって美しい話である。このことは永岡産業、永岡商事のそれにそって。もっともよい反省の資料として特に記したのである。

茶道と私

私が茶道に興味を持ち初めたのはたしか昭和十年ごろで、当時東京の小倉石油の代理店として朝鮮、満洲、北支方面で同社の製品販売に当っていたころである。その小倉石油が日本橋小舟町に本社ビルを、その後日ならずして小倉常吉翁の自宅として氷川町の旧鍋島侯の邸宅を譲り受けた。その新築披露に招かれた時大茶会の催しがあった。これは私にとって初めてのことであり、小倉家としては全盛時代ということもあって、先ず玄関には名匠左甚五郎の彫刻を飾り、茶室でお茶を頂くまでの間を、小倉家初代の家宝をならべた展示場がしつらえてあって、そこには花器、御所車の金蒔絵をした文箱など国宝級の物をはじめ重要文化財クラスの物が展示してあった。これらを拝観のあと茶室に案内されたのであるが、茶のお点前など何一つ心得ぬ私どもは、ただ案内役の導くままについて行くだけ

茶坊主が白い着物に青い帯を締めた姿でお茶を運んで私どもをもてなしてくれたことを覚えている。その時の国宝、重要文化財クラスの展示物は、稀に見る骨董品ばかりで、余談にわたるが、その時展示されてあった伊賀の耳付き花入れは、その後大阪の田中車輌の社長に九百万円か一千万円で買取られ、さらにこれが四、五千万円で松下幸之助氏の手に移ったとも聞いている。

この小倉家の茶会には、私と小倉石油を結びつけた北風氏と同行したのであるが、帰途北風氏が言うには「おれたちも、せめて茶道に興味を持ち、書画骨董を集めることによって人生にうるおいを持とうではないか」と感じ入っていたものである。

その後、北風氏は次々と茶道具、書画骨董を買い求めていたが、大雅堂の絶品が手に入ったのを記念して茶会を催した時、下関の彼の家に招かれたものだが、当時すでに相当な物を集めていたことを覚えている。

こうしたいきさつがあって茶道に興味をいだきはじめた私は、朝鮮陶器の蒐集に熱をあげ、これについて妻もお茶のけいこに精を出すようになり、三輪松雪という表千家の先生が私の家に出入りするようになった。私が買求めた陶器はこの三輪先生に鑑定してもらっ

たりして、私は毎日のように自家用車で朝鮮各地を走りまわって骨董品を買い求め、その数も百数十点に及んだ。このうちのいくつかが、李王家美術館に出品されることなどもあって私は大いに気をよくしたものである。

さらにそれに飽き足りず、京城の自宅の前の高台を買求めてここに茶室を建てた。これは純日本式なもので、そのためには床柱など主な材料は京都まで私が買付けに行ったり、そのついでに京都の有名な茶室などをほとんど見てまわったり、参考書を買求めるなどしたり、それはそれは大変な熱の入れようであったものである。それにこの純日本式の茶室に配するに控えの部屋として、総督府の前にあった朝鮮家屋を買い取ってこれを運んで再現した。このために屋根瓦その他の古いものを各地の田舎から買い集めるやら、茶庭に高麗時代の燈篭をさがし出して据えるなど、純日本式と朝鮮風をアレンジした我ながらりっぱなものが出来上がった。

この茶室開きには、京都妙心寺派の管長・華山老師その他の方を招いたが、茶室には老師によって「碧雲荘」と命名をいただいた。しかし、こういった私にとって宝にもひとしい茶室も茶庭も茶器も、終戦と共に朝鮮に残したまま引揚げ、わずかに利休の茶杓と高麗

の三島茶碗その他少々を持ち帰ったのみである。

だが、朝鮮陶器に寄せる愛着はどうすることも出来ず、北風家貯蔵のものを十数点だけは高価の代償を払って譲り受け、今日もなお愛玩し続けている。かつて私が朝鮮時代、茶碗の蒐集に熱中していた頃、朝鮮陶器の鑑定家として有名な人から次のような話を聞いて感銘したものである。

人間が同じ母の腹から生まれても出来のいい子供と悪いのがあるように、陶器も同じ窯で同じ陶工の作品でも出来、不出来があって、出来のいい茶腕は次々とりっぱな人の手にわたって大切に手入れされ使われる事により格付けされて何十万円、何百万円の名器と謳われるようになる。

だいたいこういった意味の話であったが、これ以来、茶腕その他陶器類にますます興味を深めるようになり、それにともなって茶の道にも精神的な面で深く心をひかれているし今も変りない茶道精神を自らのモットーとしている。

こういったことから豊後高田の自宅には、朝鮮時代に三輪氏につくってもらった茶庭を頭に描きながら、水崎の庭師後藤氏（故人）をわずらわして出来上がったのが現在の茶庭

で、燈篭や古井戸の枠を求めるのにずいぶんと苦労を重ねたものである。そして茶室、茶庭の出来上がったのを機会に旧知を招いて茶会を開いたのをはじめ、折りにふれ同好のお茶の先生方を招いて茶会を催している。

戦前・戦後の海外旅行

満州・北支行

戦前の海外旅行は、京城に本拠を置いた頃で、安東県、奉天、撫順、長春（のちの新京）ハルピン、大連等、満洲の各地には商用をかねてほとんど足跡を印している。

北支では天津、北京、青島、済南。中支では上海等、今日ではなかなか行けない土地をよくも歩きまわったものである。

戦後は台湾、沖縄（返還される前）香港、マカオ、それからハワイ、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ワシントン、ニューヨーク、シカゴ、ロンドン、ドイツ、フランス（パリ）、イタリー（ローマ）等、欧米一周の石油視察団に加わって、短期間ながら世界の主要都市は

一応見聞することが出来た。

先ず戦前の満州には鈴木在職中、牡丹江にに行くため京城、元山、清津、羅南と長途の汽車の旅を続け、馬賊の出没するという間島まで行って木材の受渡しに立会った。この旅では馬賊にそなえて、鈴木商店の嘱託で、馬賊仲間に顔の利くという男に護衛されて現地をまわったものであるが、言葉も通じない異国の旅は初めてであった。

天津行

次の北支旅行は、天津、北京、大連に小倉石油の販売会社をつくるためで、京城飛行場から平壌、平壌から天津軍用飛行場に着いたのであるが、この日は風雨が強く、飛行出来る状態ではなかったが、世界一周旅行をやってのけて有名だった安部飛行士が「この程度の天候なら飛びましょう」ということで京城を飛び立ったものである。しかし機は十人乗りくらいのプロペラ機で、飛行中にエアポケットに入ると、奈落の底に引き込まれるように落下することを何回か繰り返しているうちに酔ってしまい、苦しさのあまり、南無阿弥陀仏を何回唱えたことか。

平壌までは兎に角無事着陸したが、それから先は安部飛行士は乗らず他の飛行士と代わった。不安ではあったが、天候も回復したので平壌から天津に向かって飛んだ。ところが

着地の軍用飛行場は荒れ果てており、着陸条件は最悪であったが、兎に角ここも無事着陸することが出来た。それにしても悪条件ぞろいによくも無事着陸し得たものである。

その当時の天津は、日支事変勃発直後でもあり、日本人商社が次々と進出していて発展途上にあった。私はここで日本人商社として有力な手島氏（綿布商）と提携して北支小倉石油販売商社を創設し、さらにこれを北京まで延ばすことにして北京支店設立のため北京に行くことになった。

ところが天津は大陸特有の大洪水の後で、市街地付近まで土葬の寝棺が置いてあり、眼をおおう有様だった。天津から北京までは急行列車にしたが、この特等室が凄く豪華なもので、シートも広く日本の列車とは比較にならぬものであった。

北京行

北京では、日本租界にある六国飯店という一流ホテルに泊ったが、ここで驚いたことは食事付きで泊るのと、部屋だけ借りて泊るのとでは、食事付きの方が安いということで、どうしても納得できなかった。食事付きで泊ると三食の外に中間でケーキとコーヒーの時間があり、このため外出先からわざわざホテルに帰って毎日四食を完全に平らげた。そのまた食事の美味だったことは、いま思い出しても生ツバが出るほどだ。

いま一つ北支切っての有名な存在である万寿山の博物館を見学に行ったが雄大な人工池の眺めにも一驚を喫した。博物館の内部には中国特有のヒスイのコレクションが陳列されているが、その古びた年代といい、細工といい正に世界に類のない逸品揃いであったと未だに記憶が生生しく残る。幾多の歳月と戦争を経来りながらこの万寿山だけは今もりっぱに残っており、北京政府の大きな建物と共に北京の名所として、ニュース写真など見る時、昔が思い出されてならない。

大連行

次は大連と青島であるが、大連には関係商社の出張所があり、山県通りという所に小倉石油の製品を取扱っていた大同石油と言う私の関係してゐた店がありここに私が仲人をした私の親戚でもある。小野元就君其の妻清子さんが居住してゐた。店の者の案内で、市内見物を案内してもらったことがあるが、それにも増して懐しかったのは、同じ郷里、しかも同じ部落で育った小学校時代の同級生・山本武彦君が写真屋をやっているのに久しぶりに会ったことだ。

ここの旅行では大連の一流ホテル「浪速ホテル」に泊って近くにある有名な星ケ岡のゴ

ルフ場を見学したが、ここではプレーはやらなかった。

青島行

青島では永岡洋行という店を山の手の小林通りに構え、田尻節蔵君（この人は今でも健在で、宮崎県高千穂にいる）を支配人として京城から転勤させ、仕事も順調に行っていたが、田尻君が何かの都合でやめることになり、その後任を現地で採用したが、この人が間もなく召集されて終戦。このため青島での経営は一文も私の手に戻ることなく、なんのために店を出したのか判らない結果だった。

青島は霧の深い美しい街で、東洋一といわれる海水浴場があり、海辺には衣類、所持品を入れるロッカーが備えてあり、ドイツ人の経営する大きなレストランがあって、白系露人や世界各国の美人揃いでサービスに当っていた。そのため毎年避暑客が上海方面から自家用車を船に積み込んで一家揃って繰り込んでいた。

日本人は僅かであったが、私は青島港に上陸すると、近くにある三階か四階建ての日本旅館を常宿として避暑を楽しんでいた。ここには鈴木時代の友人もいて、落花生と無煙炭の取引を朝鮮とやっていた関係でここに店をもつ事に此の土地を選んだものである。

上海行

上海には長崎から三日がかりで着くことができた。私が初めて行ったのは上海事変の直後で、海軍陸戦隊がハバを利かせていた頃である。長崎をドラの音に送られて出港すると、活気あふれた長崎港と、広大な三菱造船が甲板から望める。海上三日の長旅で上海の港の入口にいたると、とてつもなく大きい石油タンクが林立しており、タンクとタンクの間にゴルフ場のあるのが見える、そのほかヨットハーバーなど石油会社の至れり尽せりの施設を眼のあたりにしてびっくり、ド胆をぬかれた。

上陸と共に厳しい税関をパスして、マンチェスターホテルに入る。このホテルは陸海軍の将校たちの常宿で、民間人はごく少数しか泊っていなかった。上海の夜の街の遊びには、ずいぶんおもしろい所もあるらしく、映画館などは九時ごろから始まって十二時か、一、二時ごろまでやっていたが、この点がまず日本とは異っていたようだ。料理店などは長崎から来た人の経営が多く、長崎亭といった風な日本名の料理店がたくさん出来ていた。上海での外国人との遊びでは筆につくせぬものがある。

この旅行で、初めて三十七、八階建てのビルがあるのに一驚を喫し、さすが国際都市、東京、大阪とはケタが違うと思ったものである。この時は北風君と一諸だったし、二人で

関係していた大同石油の店を上海に出すことが旅行の主な目的であったので正金銀行ビルの一室を借りて上海に店を開いた。

この頃の上海の市政は日本軍の手に移り、当時の司令官であった松井将軍の名をとった松井通りなど日本名の町が多く、整然とした街造りが出来ていた。

上海の港の海の色は赤ちゃけて汚れていたが、なんといっても一大国際港であり、その後、港が、街が、どのように変化しているか、戦後訪れたことがないので知る由もないが、生命のあるうちにいま一度訪れてみたい、あこがれの上海でもある。

沖縄行

沖縄への旅は、戦後初めての海外旅行で、これは昭和石油の招待旅行であったと思うが、海外旅行の旅券を受けるやら、注射をするやらでずいぶん面倒な手続きを済ませて福岡から日航機に乗り込んだ。機内での食事や、日航のサービス品をもらうなど、ずいぶん物珍らしさを感じたもので、沖縄の上空にかかるとサンゴ礁のきれいな海が眼下にひろがり、海の色が内地のそれと全然異った青さで、すきとおっているのが印象的だった。

空港に降り立つと歓迎団の歓迎のあいさつを受けるやら、ハワイなみにレイをかけてもらうやらものめずらしい事にびっくり。ホテルに着いてホッとした。これから三、四日間の島内見学が始まったのであるが、大東亜戦争の敗戦の跡をバスで廻り、戦争の犠牲の数々を記録した記念碑や、数多くの学生が一カ所で散っていった洞穴など、あまりいい気持ちはしなかった。しかしパインアップルやバナナの農園などはいい見学だった。

当時の沖縄旅行は、買物旅行といわれていたほどで、日本街には専門の土産品店があって、時計、宝石類などを、みんな金をはたいて買っていたが、私はドイツ製のミニカメラを十万円余りふんぱつして買ったが、その後別に使うこともなく、こんなムダなことはないと今でも後悔している。

台湾行

台湾へは、ペンターブル石油の招待で一回、昭石会で一回の二回旅行したが、台湾政府は、昔の総督府時代の一帯が政治、経済の中心地域になっていて、バスガールの案内を聞きながら台北市内、台湾神社などを廻った。台湾は昔の鈴木商店時代の因縁の地であり、当時の総督府総務長官後藤新平から鈴木商店の大番頭金子直吉が可愛がられて鈴木が大きくなったことなどもあって、昔がしのばれてならない台湾旅行であった。

当時の台湾旅行では、北拈という温泉地の色街に、日本人は必ず一、二泊したもので、日本風の料理屋で、台湾の若い女性からワンサと取り囲まれて「旅の恥はかきすて」的な鼻下長族が、いい思いをしているのが常識とされてゐた。

二回目の台湾旅行の時は、朴韓国大統領が訪台していた時で、歓迎門やら韓国旗やらで街が飾られていたので、これらの地域を離れた所でパナマ製品などを買求め、深夜喫茶や日本人相手の酒場をまわった程度だった。しかし熔接棒の取引きを希望する現地の人が二、三回宿に訪ねて来たりして、この商談に時間をとられたが、将来の危険性も考慮してあまり乗気になれなかったことが失敗を未然に防いだものとして今でも満足に思っている。

（この取引きでは以前、私の大阪の店にいた男が取引きを引受けてその後失敗して大きな負債をかかえている）

香港、マカオ行

香港行きは台湾経由で行き、空港に着いたが、ここは海に突き出している空港でこれでは余程熟練した飛行士でないと海に突っ込んでしまうとひやりした。とも角無事着陸して団体バスに乗って指定のホテルに着くことが出来た。それから先は一般視察団と同じコースを廻った。この旅行で特に思い出の深いのは、マカ

オで団体客と一緒に賭博場に入ったが、みんなが賭博に興じている間に、私はいろんな種類の賭博を見物しているうちに一行の姿を見失い、一人取り残されてしまった。これはとんでもないことになったとあわてて一行のバスを追いかけるためにタクシーで香港行きのマカオ埠頭まで行ったが一行はまだ着いていない上に、香港行きの渡し船は出そうでもあるし、言葉は通じないしで、この時くらいあわてたことはない。

幸い賭博場のマッチを持っていたので、近くにいた人にこのマッチを見せて、ここに電話して日本人の一行はどうしたかと聞いてもらうよう手まねで頼んだら、一行のバスは間もなく桟橋に着くころだということでホッと胸をなでおろしたものである。

ところが一行は、私一人の姿が見えないので、かなりの時間を待ったそうで、バスは表通りでなく裏通りで待機していたため、表に飛び出した私にはそれがわからずにタクシーに乗ったもので、この時ほど団体旅行の場合は一行から離れるものではないということを痛感したことはなかった。

香港に帰って一泊したが、宝石、時計などの土産物を買求めるため夜の繁華街に出たが、幸い知人に宝石商に案内してもらった。顔見知りだったため陳列ケースにならんだの

を眺めるなどのこともなく、奥の特別金庫から出して来たのを手にとって見ることが出来た。それはダイヤモンドよりはるかに高価なもので、赤、青と色とりどりのものを見せられて驚き入ってしまった。もちろん買うなどということは到底思いもよらぬことであったが、宝石の魅力というか、ひきつけられるような気持になったのは、後にも先にもこの時が初めてであった。

この旅行で、僅か一万円ほどを出して礼装用をかねたダブルの洋服を誂えたが、わずか二日間で仮縫いもすませてりっぱに仕上げてくれたのにはびっくりした。今日でもこの時の洋服は香港旅行の記念として私の愛用服の一つである。

アメリカ行

燃料新聞社主催の欧米ガソリンスタンド視察団に参加して約二十日間の旅行をしたのが昭和46年4月、私が六十九才の時で一行中の最年長者、他は二十七、八才から三十代、四十代、五十代。これらの元気のいい人たちにまじって、わずか二十日間という短期間の旅行だっただけに、毎日々々が飛行機、バスという強行軍。よくもまあ無事に帰れたものだと思っている。

羽田からホノルルに着き、ヒルトンホテルに入ったが、この第一日目にすでに「お上りさん」ぶりを出してしまった。便所に行こうとしたが全部有料便所。おまけに小銭の持ち合わせがなく、ようやく両替をすませて来てみればいずれも満員。やむなくホテルの近くのレストランに駈け込んで無料便所で用を足したという次第。この貴重？な経験から以後は有料便所用の小銭を持つことにした。

ホノルルは、正に世界の楽天地というか別世界というか、観光と避暑の地であり、新婚の日本人が最も多く、外人の老夫婦のカップルも多い。ホテルの八階の部屋から海水着またはアロハのままエレベーターで降りて海岸まで行くことができる。夕食後、街の見物に出たが、ほとんどが土産物の店とかバー、コーヒー店などで、老人の私にはあまり縁のない所、静かにホテルで寝たり海岸を散歩したりする程度若さがほしひとつくづく思った。

翌日はハワイ島内の主な所をバスで見物した。墓地も見たが日本とは全く趣きを異にしており、広々とした公園みたいなもので、どの墓も同じ大きさで、きれいな花が供えてあった。こんどの視察旅行の目的がスタンド見学であったが、ハワイでは別に参考になるようなスタンドは見受けられなかった。この日もハワイ泊り。

翌日はここを飛行機で発ってサンフランシスコまで五時間四十分の旅で夕刻着、直ちに

日本料理専門の店に案内されて夕食を済ませて夜の街の見物に出かけたが、ほとんどが七時過ぎには閉店していてウインドをのぞく程度、たまたまサンフランシスコ最高の建物（四七階建）の屋上に娯楽室があるとのことで、ここに行ってジュースなんぞを飲みながら桑港の夜景を眺めることができた。

翌朝は早々にホテルを発ってバスで市内見物して午後空港からロスアンゼルスに向かい約一時間で到着、ホテルに入る。翌日は午後のスタンド見学の前に、映画の都ハリウッドの撮影所を見物したが、おかげでそれ以来洋画を見る度に、「ああ、このシーンはこうして撮ったのだな」と大へん参考になった。

午後のスタンド見学で感銘を受けたのは、日本人経営のガソリンスタンドが、ロスで模範的経営店としての評判を得ているということであった。ここで主人からいろいろと経営のコツを聞いたが、なんといっても「信用第一」をモットーとしていることで、ガソリンの売り上げのみでなく、修理品を新品と取り替える場合、古い部品を全部陳列棚に揃えておいてお客に見せ僅かなものでも客に安心と信用を得るように細かい心づかいをすることから始めて、価格も特に安くするというようなことはせずに、あくまでも適正価格で売る

ことによって顧客の信用を得て今日に至っているということを聞いた。これは私が終始一貫遵奉している信用第一主義と誠意、努力が商売の基本であるというのと通ずるものがあり、大いに共感を覚えた。これがアメリカ視察旅行の唯一の収穫であったと思っている。

その夜、ロスを発ってダラスに着いたが。泊ったホテルがケネディ大統領が暗殺されたすぐ近くのホテルで、どのビルのどの窓から銃口が向けられたなど細かいことまで知ることができた。ホテルの近くのケネディ大統領死去の場所に記念碑も建てられ当時の模様をしのぶことができた。

翌日はダラス郊外で開かれているサザンオートモーティブショウ（自動車用品展示会）を見学したが、ここには日本商社の専門展示場もあり、日本品がよくぞここまで進出したものぞと意を強うしたものである。

ダラスは一泊だけで、夕刻空路ワシントンに向かい僅か二時間半でワシントンに着いたが、飛行場の関連業務員のストで赤帽も姿を見せず各自がトランクを提げてバスの乗り場まで歩くというハプニングもあった。

翌日はアメリカ商務省のゼミナールに出席、午後はアメリカ石油協会のゼミナールと、

初めて見学団の正式勉強会であったが、商務省での資料などは大いに参考になるものがあり、会場も日本の県議会議事堂みたいな所で、英語と日本語で通訳する日本女性が、二階のガラスボックスの中から、私どもが納得するまで説明してくれたのには感心させられた。

翌日は市内のガソリンスタンドの見学が予定されていたが、学生のストがあり、国務省前の広場には前夜から毛布持ち込みで徹夜のストをやっており、この中にはアベックもあり、自動車で押し寄せてくる者もあって、大群衆の物凄いスト風景にびっくりした。

驚いたといえば、黒人街のアル中患者の部落や貧民窟で、世界に誇るワシントンの一角で、こうまで人種差別と、貧富の差の甚だしさを目のあたりにして意外の感を深くした。アメリカのかかえた政治問題のうちで、黒人問題は、なるほど大変なことだとつくづく思い知らされたものである。

ケネディ墓地はワシントンの名所になっているが、ここには毎日衛兵が交替で儀礼を続けているというが、こういった点は日本では見られないことで、アメリカにはアメリカなりの国民精神というものが低流にあることを知らされた。この付近には日本との戦争で勝利をおさめたことを記念して、何んとか三銃士といった銅像があって、訪れた私ども日本

人の胸を打つものがあった。

五月一日夕刻、ニューヨーク経由でカナダトロント飛行場に向かう。機内で日本人らしい女性と同席したが、いろいろと話を聞いてみると、この女性はトロントに住んでいる二世で、ニューヨークに買物に行った帰りとのことで、トロントは気候も空気もよく、ニューヨークなどには住む気がしないのでここに永住するということだった。

トロントでは、カナダ石油協会の招待で、トロント石油協会のセミナーなどがあり、スタンド見学等の予定があったが、アメリカを視察したあとのカナダのマーケットは小さく、その上国営でもありあまり参考になることもなかった。カナダは寒い国ということを予想していたが、意外にもトロントは気候もよくてほんとうに住みよい街であることがわかった、さきに機内で会った二世の女性が「住みよい」といっていたことが実感として思い出された。

翌日は午後バスでナイアガラ瀑布の見物に出かけた。滝壷の近くまで歩いて行って眺めたり、エレベーターで高い所から瀑布を眺めたりした。この水源はアメリカ側とカナダ側から流れ込んでいることも確めることができた。さらにアメリカとカナダをつなぐ橋があ

って、その中央に両国の国旗がはためいていることも印象的であった。
ナイアガラの土産品にも日本製品が多く、特に買いたいものもなかったが、毛皮類は日本では得られぬりっぱなものが安くてあったが、税金や輸送などのこともあって買うことをやめたが、大阪の同行者何人かはかなり買求めていたようだった。
ナイアガラからフォールズまで特別バスで行ってここからニューヨークに向かうことになっていたが、飛行機が遅れるとのことで、予定を変更してバッファロー発ニューヨークに着いたのは夜中であった。ニューヨークはワシントンからトロントに行く途中に空からだいたい市街の様子は見ていたので着いてからはそれほど驚くことはなかった。
しかしホテルに着いて驚いたのは、ホテルの中にもスリや盗人が横行しているので気をつけるようにというポーターの話には、全く驚いてしまった。部屋も二重ドアで、内部からクサリの錠をかけるようにしてあるという慎重さにはおそれいってしまった。
ニューヨークは二泊三日で、こんどの旅はもっともゆっくりした日程だった。滞在中の主な予定は三井物産支店の訪問であり、三井物産グループのうちの何人かが三井物産の招待で日本クラブでの夕食会や国連本部の視察、有名なニューヨーク港の自由の女神像など

を見たり、土産品の整理、日本への通信などとなかなか忙しく、空港に行くバスの時間ギリギリまで大多忙を極める始末だった。
ニューヨークでは意外なことで驚くことが多かったが、中でも三井物産支店を訪れたさい受付に外人の中年美人がいて、これが社長クラスのテーブルを前にイスにデンと構えていて、この美人受付嬢？のOKなしには応接室はもとより事務室にもどこにも行けないというシステムになっているらしいことであった。
また日本クラブでの食事はすべて日本料理で、トウフから漬物に至るまで日本でも食べられないような特級品ばかりで、醤油、日本酒、刺身と、ありとあらゆる物が日本の一流料亭でもお目にかかれないという豪華さ。クラブ制になっているため客も一流会社のメンバーばかり。集まる婦人方もそれら一流会社幹部の夫人たちで、和服姿もあでやか、ここがニューヨークのド真ん中かと眼を疑うばかり。
二泊三日のニューヨークの旅は、ほとんど和食で、むしろ洋食のうまいのを食べたいと思ったほどだった。ニューヨークでの日程を終えて次の目的地ロンドンへ向かう。

ロンドン行

ロンドンではわが昭和石油の親会社ともいうべきシェル石油での勉強会が主な目的であるため、早々にホテルを発ってシェル本社を訪ねたが、会議の中途で退出して三井物産ロンドン支店の青木支店長を訪ねた。八幡支店長からわざわざ紹介状ももらっていたこともあったし、三井の社員が迎えに来てくれてすっかり恐縮してしまった。青木支店長からはいろいろと経済問題の話を伺ったが、その中で日本の円はいつまでも今のままではいかないだろうから、やがては切り下げが行なわれるであろうことなどを話しておられたが、今にして思えばさすがは三井だけに全世界に視野を拡げて物事を観察していると痛感させられるのである。

ロンドンはさすがに古い歴史を持つ国だけあって、アメリカの各都市とは全く趣きを異にしており、服装一つをとってみても、ネクタイなどアメリカの派手なものに比べて黒っぽい地味なものを用いている。また街で時々シルクハットにステッキ姿というのを見受けたものである。

翌日は早朝から英国王室のバッキンガム宮殿を見学に出かけた。運よくばエリザベス女

王がお出かけになるお姿を拝見できるのではなかろうかと期待していたのであるが、女王はご別邸にお出かけになっていられるとかでお留守の宮殿拝観となった。あの古式床しい衛兵の交替のもようを見ることが出来た。世界各国から集まった観光客は宮殿の周囲を取り囲んでさかんにカメラのシャッターを切っていた。

パリ行

五月六日夕刻、ロンドンからフランス空港着。バスで一時間以上かかってパリのホテルに着いた。ホテルでは長旅の疲れも出ていたので休養するつもりでいたが、一行の若い連中は元気いっぱい、早速夜のパリの街に飛び出して行った。こうなると私もじっとしておれず有名なポルノ映画館に行ったりしてパリ情緒を味わったが、途中、バーやキャバレーの女子軍に追いかけられ、これを逃げ出すのに苦労している姿を、一行の連中からからかわれるなど、やっとの思いでホテルに帰りついたのは朝の四時。それから洗濯をするやらで寝る時間もなかった。

翌日はフランス石油協会、フランス石油のゼミナーでパリ市街のスタンド見学をしたあとパリ郊外のゴルフ場の食堂でもてなしをうけたのは意外で嬉しかった。パリ郊外の田園風景が今でもあざやかに印象に残っている。このゴルフ場で記念に買ったゴルフ帽は今で

も愛用している。

パリの市内見物で凱旋門やルーブル美術館などを回ったが。見るもの聞くもの驚きばかりで、モナリザの前で足を釘付けにされてしまったことも記憶に新しい。美術館の近くに世界各国から集まって来る画家たちの勉強のために集合所があって、たくさんの画家たちがカンバスを前に絵筆を動かしている姿も印象的であった。

じっとそれらを眺めている私の前を通り過ぎる若い男女が、いきなりキッスをしたのにはびっくりしたが、それがちっともいやらしくなく、ごく自然に感じられるのも、パリというお国柄のせいだろう。

パリ滞在は二泊であったが、一行は若い団員は、夜間可なり活躍したらしく、だいぶ小遣いを使ったようすだった。

ローマ行

ローマに着いた五月九日は日曜日だったためスタンド見学やゼミナーもなくかねて見たいと思っていた古代遺跡に足を向ける。城壁に立ってローマの市街を眼下にする。イタリア政府が、こうした遺跡はあくまでローマの歴史として残し、新しいローマの街造りは別個に進めているということは日本も大いに学ぶべきことだと痛感した。

トレヴイの泉の前には、ほとんど観光客が立ち止まって「再びローマに帰って来られるように」の伝説どおり銅貨を投げ入れたり、記念撮影をやっていた。この旅行で日本を発つ前から、イタリアは靴、ベルトなどの皮革製品が安くて良い品が多いと聞いていたので駅の売店まで出かけてメッシュの靴とバンド、それに安物ではあったが、日本ではとうてい手に入れられない鞄を買ってホクホク顔で夜おそくホテルに帰りついたものだ。

翌日は午前中、イタリア政府機関のアジワブ石油会社のゼミナールに出席したが、あまり参考になることもなさそうに思えたので一行と共に郊外散歩に切りかえた。

西独行

その日の夕刻、ハンブルクの空港に着いて初の西独入りをした。空港での第一印象として、ロビー、通路すべてが鉄網材が露出しており、これに適当にペンキで着色してあるのみ、いかにも西ドイツらしい合理化というか、ムダを省いた点がうかがえる。この点、派手な日本、アメリカとは非常に対照的であると感じた。要するに質素で耐久性のあるもの―の一語につきるようだ。

翌日、一行と共に無人給油所、無人洗車場ならびに整備場を見学したが、さすがにアメ

リカをはじめどの国でもみかけられなかった研究のあとがうかがわれた。
世界でも有名なソリゲンの製品を記念に買おうと思ったが、時間がなく、ここでは何一つ買うこともできず西ドイツに別れを告げてヨーロッパ最後の訪問地であるコペンハーゲンに向かった。

コペンハーゲン行

コペンハーゲンでは海岸のレストラン式ホテルに泊った。ここから市内までにはかなりの時間を要するが、それでも若い連中は夜の遊びに出かけた様子で、私ども老人組は明日に備えてホテルで休養することにした。
翌日はバスでコペンハーゲンの街にバスで出かけたが、途中ワラぶきの別荘風の家がたくさんあり、フリーセックスの街とかいうことで、広々とした芝生の上で若い男女が寝そべっている姿が見受けられ、少からぬ刺激をうけた。ここデンマークという国は、厚生施設や生活保護制度の行き届いた国で、国の予算の四〇パーセントをこれに充てているため一生あくせくと自分で働くことに努力するような国民的気風はなく、気候も夏で14度冬で0.2度と、まるで楽園のような国であり、フリーセックスとはいうものの、それなりに法律で定められたものがあって、それによって子供が出来た場合は向う二十年間の養育費を出さねばならないというきびしい掟があるということを聞かされた。
ここを最後に欧州とも別れを告げることになり、コペンハーゲン発のＪＡＬ北極経由で帰途についた。予定では機中で一泊となっていたが、白夜のこととて夜がなく、眠る気にもなれず、流氷のさまなどを機中から撮影することに夢中になった。北極通過の記念に日本航空から北極通過記念証をもらった。私はこれを更に記念するため４０２便の平吹機長をはじめスチュワーデス萱場優子さん、視察団長、同行の三井社員等々のサインをこの記念証にもらって保存している。
かくして流氷地帯を通過し、アラスカの空港で給油のためと最後の土産品買入れのために二時間休憩して羽田に向かい、十三日夜遅く弟や東京の店の人らに迎えられて羽田に着き二十日にわたる欧米の旅を終わった。

京城行

私が昭石会の会長をしていた昭和四十七年五月頃だったと思うが、九州全会員の意見で韓国旅行をすることになり、西鉄観光の旅行案内社のプランで福岡空港を飛び立ち玄海灘を一時間足らずで釜山海雲台付近の空港に着陸した。昔懐しい

釜山郊外の風景が随所に見受けられたが、スケジュールの都合で残念ながら釜山の街には行けず、直ちに京城行きに乗りかえることになったが、京城の趙九福君に土産として携えた博多人形が税関吏に押さえられたことは残念でならなかった。ここから京城までの飛行機は、正にオンボロ機で、窓のドアも十分にしまらぬ始末で、機内も不潔、それに大邱上空を通過する頃は風も強くなり、この調子では京城まで無事着陸出来るのかと不安に思われたが、どうにか金浦飛行場に着陸することが出来た。

飛行場には戦後初めて面会する昔私の会社に勤めていた趙九福君一家が孫までつれて出迎えに来ていてくれるという感激の再会の場面があった。団体客の一員である私としては別行動をとることはどうかと思われたが、折角趙君の方で車も用意してくれてあることだし、一行の了解を得てその日は別行動をとらせてもらうことにし趙君にすべてをまかせることにした。

金浦飛行場から京城市街までの道路は、昔の面影も残さぬほど広々とした立派なものになっており、京城市内に入ると二十階以上のビルが建ちならび、東京をしのばせるような大都会に変っているのには先ず一驚を喫した。しかし昔のままの姿を残している所もかな

りあった。私は一応趙九福君の家を辞して団体のいるホテルに帰った。

翌早朝、私は一人でホテルを立ち出て、旧明治町、長谷川通り、黄金町などと各方面を散歩かたがた歩いてみた。私が戦前事業本部として借りていた日本生命ビルの三階建ては昔のままの煉瓦造りの古びた姿で私を迎えてくれた。

三越、朝銀本店、殖銀、京城郵便局、京城市役所等の大きな建物は、名称こそ変っていたが昔のまま残っていた。もちろん南大門もそのままであった。

翌日、団体から離れて寸暇を利用し、趙九福君の案内で私の戦前の住居である光熙町二丁目の鉄筋三階の家と朝鮮家屋を訪ぬてみたが、建物は昔のまま残っており、今は大学教授の住宅となっていて、家の中までは入ることが出来ず外観だけ懐しく眺めて来たが、朝鮮家屋の前に、私が精魂こめてつくった茶室は跡かたもなく取り壊されていたのが残念でならなかった。

この地下に、私が、蒐集した朝鮮陶器ならび茶道具などの重要なものが妻の手によって埋められてあるので、せめて一品でも掘り出して持ち帰りたいものと居住者の大学教授に了解を求めたいと思ったが、趙九福君が、それはいずれ時期をみて私から話をした上のこ

とにしょうというのでやむなく昔のわが家を写真にだけおさめて、団体の一行と落ち合う場所に引き揚げ、一行と共に李王家の美術館や動物園等を参観した。

その夜はキーサンパーティのあとウオーカーホテルの国際舞踏場、賭博場等、まるで無警察状態というか国際的ショーやモナコ同様のお遊び施設のある所を一行と共に夜遅くまで遊びふけったものであるが、こういったことは昔の京城を知る私にとっては、ただ意外の一語に尽きることで、一行はそれぞれキーサン遊びに興じていたようであるが、私は旧社員が思ったより多人数京城にいることが趙君によって知らされていたので、その一人一人を訪問することにした。

その一人は和信百貨店の副支配人、一人は朝興銀行の守衛長。それに開城で油商をやっている張さん一家がホテルに訪ねてくれたほか昔の社員三人が次々と訪問してくれた。これらの人たちは、みんな昔どおり私を社長と呼んでくれて再会を涙を流して喜んでくれた年月が経ち、立場は異っても、心の通い合った人間関係は、いつまでも、いつまでも温く通い合うものであるということを、この時ほどしみじみと味ったことはない。

こうして京城の旧社員と感激の再会をして人間と人間のふれあいに胸ふくらませて京城

を後にして帰国したのであるが、昨年夏、趙九福君の長女明子さんから、趙君が脳血栓出血のため亡くなったという悲報を受け取った時は、心の友を亡した悲しみで、私は終日仕事が手につかず、趙君の冥福をひたすら祈るばかりだった。

その手紙の一節に

…特に永岡様が下さった録音器は臨終まで父はそばを離さず、あなた様のことをしのんでいました…。

とあった。この録音器は、私が前に述べた団体の京城旅行のさい、趙君への土産にと税関で没収された博多人形と共に拵って行ったものだった。とりあえず悔みの手紙を長女の趙明子さんあてに出したところ、次のような第二信が届いた。

謹啓　永岡様、お悔みのお手紙拝見いたしました。お手紙を手にした瞬間、また父のことが思い出されて涙で何んにも見えなくなってしまいました。

永岡様は父にも増して仁慈と徳を具備されているお方だと感じました。父のアルバムを整理しているうちに、大分石油会社のことを紹介した雑誌を拝見しました。私はいま母夫と四人の子供の七人家族です。夫は国家安全保障会議に勤務している研究官（副局長

級）で四十二才です。そして長女は十五才（中三）長男は十三才（中二）で、私は三十五才になりました。永岡様のご家庭のご繁栄のことは父から聞いてよく知っています。石油会社が末永くご繁栄いたしますよう遠くの地からお祈りしています。

永岡様のご健康とご家族のご安泰をお祈りします。

1973年8月19日

趙　明子

趙君の夫人には面接したこともあるが、明子さんが三十五才とすれば、私が朝鮮を引揚げた頃は五、六才の少女であり、その面影すら私の記憶にないのは残念でならない。

私の尊敬する人物像

近藤卓爾先生　私の小学校高等科時代、即ち桂陽小学校の校長であった近藤卓爾先生は謹厳実直な真の教育者として、県内はもちろん県外にまで知られた方であった。私の尊敬する人は七十歳を越した今日までに、人生の師として仰ぐ幾人かがいるが、先生は私が小

学を卒えて社会に出るまでに初めて尊敬の眼で仰いだ偉大なる映像、いうなれば〝尊敬・№1〟である。永い間、幾多の苦難に遭遇したが、それを乗り越えて来た不屈の闘志と、正義感といったようなものは、私の少年時代、この恩師によって知らず知らずのうちに培れて来たのだということを、この頃はしみじみと感じるのである。

私が朝鮮・鈴木商店時代、先生が所用で京城に来られることを聞き、釜山までお迎えに出て京城までおともして、報恩の万分の一でも果し得た喜びに胸をふくらました若き日の思い出が今でも鮮やかによみがえって来る。戦後、豊後高田に居を構えるようになってからは、いく度か拙宅にお招きしたり、ささやかながら先生の喜寿のお祝いをさせていただいたりしたものである。

斉藤定蔵工学博士　私の朝鮮時代、辰巳物産、辰巳砿油その他の事業を独立経営するについて特に可愛がっていただいたというか、なみなみならぬ好意をいただいて、何かと相談に乗ってくれ、いろいろと面倒をみていただいた人に斉藤定蔵工学博士（日本油脂常務取締役・塗料部長）がある。私が朝鮮、満洲で手がけたあらゆる事業に成功することが出来たのも、斉藤博士のご支援によるものと感謝している。

まず朝鮮時代に、辰巳物産で熔接棒やニッサン塗料の販売をすることになったさい、鉄道当局に熔接棒を売り込んだり、その後、朝鮮化工、朝鮮油脂（日本油脂の子会社）の重役就任などのあっせんをいただいたり、永登浦で塗料の製造工場を創設することなど、ずいぶんとご支援をいただいたものである。

それにも増して戦後日本に引揚げ再起の足場になった戸畑工場も、実は当時戦局が熾烈になり、台湾防備のため諸施設に熔接棒の供給ということが焦眉の急務となっていた。そのためには台湾にもつとも近い九州に熔接棒工場をつくるよう海軍首脳部から日本油脂に緊急指令があった。これを受けるには株主総会、役員会等を開かねばならず、到底時間的にどうにもならないということから、斉藤博士から京城にいる私に「緊急の用件あり、至急上京せよ」とのウナ電が入った。

私はとるものもとりあえず上京してみると、上述のような緊急事情、そこで日本油脂に代って私に九州に熔接棒工場を造るようにとの話である、それには原材料の世話はいっさい日本油脂で行なうからとのことで、八幡駐在の海軍監督官に紹介状を書いてくれて、その実現のための話し合いの権限をいっさい私に任せてくれた。

こうして出来た工場が戸畑の辰巳物産熔接工場である。それもこれもみな斉藤博士の私に対する信頼からのものであり、戦後永岡鋼業が今日に及んでいる発祥の地である。

しかしその恩人・斉藤博士も今は亡い。

三井物産・平嶋俊朗社長　戦後三井物産の解体によって分散された社員によって数多くの会社が創立された。私は鉄鋼関係の仕事であった関係で、八幡物産会社（三井八幡支社鉄鋼関係社員のみによって創立された）との取引の関係で、その系統上本部的立場にある東京の室町物産株式会社の平島社長にお会いしたことがあるが、その時平島社長は「私どもはいつも、会社はお得意先あっての会社であり、お得意先を大切にすることを社是としているので、今後お互いに利用し合ってお互いに繁栄しましょう」という意味の話をされたのを覚えている。この平島さんがその後、室町物産系の会社を合併されて戦後の三井物産社長となられ、定年制によって会長に就任された時も、会長室にごあいさつにお伺いしたことがある。その時、大阪四条畷工場建設の話を申し上げたところ、その工場の前経営者、東洋鉄線の北川社長をよくご存じの様子で、その土地をいくらで買うのかと質問された。

そこで私は、北川氏に対する三井の債務を肩替りすることで、これこれの土地代になりますと答えた。ところが平島さんは

「君は三井物産の都合で取引をし、君の自主的な立場からの価格取極めではないではないか、しかも、そうしたことで工場をその土地に建設すること（北川氏が失敗して閉鎖したことの意味）には賛成しかねる。今からでもいいから三井物産との取引き条件変更を申し入れなくちゃいかないね」

と強く意見された。平島さんは三井物産という大会社の会長であり、三井側の利益という物の考え方をする最高の立場にある人が、相手の取引き先である私の立場を、かくも深く考え、私に対する思いやりのある言葉は、終生忘れるものではなく、平島さんの予言どおり四条畷工場の経営は大失敗に終わって、三井物産とのトラブルも発生したことを思うと、平島さんの私に対する教訓が思い出されてならない。こんな人を指して〝紳商〟というべきであると痛感している。

こうしたことから私の長男恵一郎が、東大を卒業して川鉄の採用試験に第一位で合格、さらに三井物産のそれにも合格し、いずれを選ぶべきかと考えた末、本人は川鉄を選んだ

ようだったが、私は平島さんのようなりっぱな人格者の下で訓育を受けることが人生にとってもっとも大事なことであると考えて三井物産入社をすすめたのである。

その平島さんの訃報を耳にした時、私はしばらくは茫然として身体中から力がぬけていくような思いだった。

鈴木商店・金子直吉翁　翁のことについては前にもふれているが、鈴木在職中の私は若くもあり、最下位クラスの社員であり、金子翁から直接お話を伺う機会などもちろんなかったが、社員に対する平素の教訓を伝え聞くところによると、根っからの商人というか、事業家というか、いつも

「商業の使命は、狭い日本の国内で儲けたとか損したとかいっていることではなく、広く他の国々と貿易を行って国を富ませることが商売本来の目的でなければならない」

といっていられたそうであるが、このことが鈴木全社員の根本精神として根強く培れていったのだと思っている。

金儲けのためには手段を選ばないという商社、事業会社の多いことは、ことし春の国会でもいろいろと問題を提起して国民のひんしゅくを買ったところであるが、こういう連中

に金子翁の爪のアカでも煎じて呑ませたいということを痛感するのである。

私どもの結婚、亡妻梅子の事

私どもの結婚は、私が二十六才、妻梅子が十九才の時である。私は当時炭坑経営の前で帝国炭業（旧鈴木石炭部）の嘱託をしていた頃、鈴木の石炭特約店であった西川商店の西川氏が、一時でもいいから自分の店も手伝ってくれとのことで、帝炭嘱託と西川商店マネージャーを兼務していた頃であり、兄を通じて知っていた藤波というおばさんが、梅子の写真を持って来られて嫁にもらってはどうかということになり、釜山の大正公園で二人だけで話し合いをした。その後、西川氏が釜山まで出向いて私どもを結ばせるために積極的に動いてくれた其の後二、三回見合いをし、結婚に双方合意が成立した。

結婚式は釜山の竜頭山神社の神前で行われたが、私たち二人とも和服姿、神前で丸い座蒲団に坐らされ、シビレを切らして困ったことを覚えている。披露宴は釜山の南浜にあったなんとかいう大きな料亭で盛大に行なわれた。郷里からは小野素策叔父がシルクハット

姿の正装で来てくれた。それから来賓祝辞で、当時釜山弁天町で大きな店を持って洋品雑貨から鈴木のサクラビールの特約店でもあった福栄商店社長の平野宗三郎氏が、私どものためにりっぱなごあいさつをして下さった。

この結婚式にもっとも骨折りをして下さった上に仲人役までつとめて下さった吉井省治さん、おそめおばさんのことは一生忘れることの出来ない恩人である。その吉井省治さんは若くして逝かれ、おそめおばさんは終戦後熊本に引き揚げられて長女と一緒に生活しておられたが、つい昨年の春九十二才の長寿で未だ元気でおられるが、長女信子が本年死去された。

私ども夫婦は、おそめおばさんの住む、熊本を訪ねたことがあるが、梅子が私には内しょで綿入れのチャンチャンコをつくっておそめおばさんにさし上げたことを後で知った。私たちは省治おじさんの仏前にお参りして、僅かではあったがお供えをしたことが、きのうおとといのことのように思い出される。

話をもとに戻すが、京城での新婚生活は、最初は借家住まいであった。結婚後間もなく朝鮮炭業会社を創立したが、私は営業部門を担当した関係で咸興の会社社宅に入居してい

たが、その後京城に居を移すことになり、五十坪くらいの土地に二十五、六坪の家を新築して住むことになった。これが私の二十七、八才の時で、それから二三年後に西川商店が没落したので、私はその持ち家(借家にしていた)十軒ばかりを三十万円前後で譲り受けた。

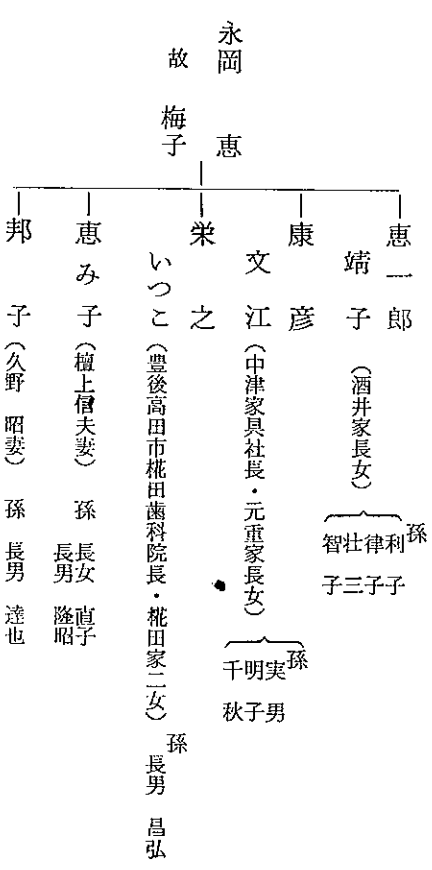
こういったことで私の生活基盤も確立し、妻もその当時が一番幸福であり、喜んでくれたと思っているが、その後仕事の関係で、夜の宴会が続くようになり、女関係でずいぶん苦労をかけたと思うが、昭和四五年に妻は六十歳で亡くなった。いま過去のことをふり返って懺悔にたえないものがある。つみほろぼしに亡妻供養に私の余生をかけたい。

妻梅子は、子供の教育、しつけにきびしかった。私は仕事一筋で、家庭のことは全くまかせきりで安心していたが、私の今日在るも妻の内助の功と、頭の下がる思いがする。

永岡家の家族構成

私は永岡家から分家して、永岡恵を戸主とする一家を構えたのであるが、今後私の子供たちが、いずれもよりよい家庭を築いて家内の繁栄を図るよう願ってやまないのである。

次に私一家の家族は



以上が永岡家の構成であるが、さらに私の願望は、永岡鉱業㈱と大分石油㈱の本流ののれん、永岡家を主とした事業が末永く続き、創業者の私の時代より更に一段と飛躍拡大することを祈念してやまない。

私の趣味と道楽

ゴルフは京城時代の若かりし頃、京城の君子里という李王家の林野を拓いて出来た京城ゴルフ場のメンバーとなり、終戦まではここによく通ったものであるが、あまり上達しなかった。戦後は別府ゴルフ場のメンバーとなっているからキャリアは四十年くらい、現在はH24、京城時代はH20くらいだったと思う。

京城でのゴルフはメンバーの選定が厳しく、文字通り紳士のエチケットを重んじた競技であり、大衆化された今日のゴルフとは比較にならぬものがあった。門司のコースは開場当初にプレーしていたもので、その他九州では雲仙、古賀、和白、宮崎、キリシマ、諫早阿蘇、レークサイド、天ケ瀬等ほとんど廻っている。本州では下関、宇部、光、広島、宝塚、茨木、京都、城陽、名古屋、箱根、伊豆、川奈、霞ケ関、我孫子、那須、小金井などでプレーを楽しんだものである。

小金井では創設当時、三万円出資メンバーであったが、戦後誰かに安く譲ってしまった今にして思えば惜しまれてならない。

海外では青島、大連、フランスなどのゴルフ場を廻ったものであるが、腕の方はさっぱり。七十二才の今日では心臓を悪くして一時中止しているが、再びクラブを握れるように目下健康管理に努めている。

ゴルフで思い出したが、京城の冬季のゴルフは凄い。雪の中、結氷の中のそれは壮快なもので、ボールを赤いペンキで塗って、これを探しながら廻るのであるが、耳には兎の毛皮でつくった耳あてをして極寒の中をプレーする。内地ではちょっと想像もつかないゴルフ風景である。

若い頃（鈴木在職中）は軟式庭球をやっていたが、鈴木の選手として京城では朝鮮銀行第一銀行、商業学校などのアマチュアークラブとは常に試合をやっていた。鈴木は専用コートを持っていたので練習はいつでもやれた。このほか乗馬クラブにもずいぶん通ったものである。

室内では下手の横好きというか、麻雀、碁、将棋なんでもござれ。四畳半の小唄なども一時は本格的に習ったものである。

老後の生活設計

私はロータリーアンとして約十八年間無欠席で、戸畑ロータリーアンとしてチャターメンバーと同じくらいのロータリーアン歴史をもっているが「無欠席」であるということはあくまでも私の誇りであると思っている。このほどの委員会で、はからずも、ことし七月一日から理事となり副会長に推薦され、さらに五十年七月一日から五十一年六月三十日までの一年間、戸畑ロータリーの会長に就任することが約束されている。この間私は健康に留意してこの大役を果すことを以て、老後の最大の社会奉仕をしたいと考えている。

ロータリーアンといえば、私が京城時代に唯一のロータリーが生れ、京城財界の一流どころでロータリーのバッジをつけた第一銀行の支店長や、私の勤めていた鈴木の支店長らが、お昼ごろになると朝鮮ホテルに出かけていたのを二十二、三才のころ「いいなあ、俺もああなりたい」と朝鮮ホテルに出掛けるのを見送っていたことを覚えている。

私の自伝風の「雑草一代」も、ぼつぼつ終りに近づいた。くどいようだが、仕事の上では永岡鉱業、大分石油をはじめ私の創立した諸会社の発展を、現役を離れてからも見守っていきたい。年老いてからは、豊後高田の自宅の茶室で、茶道を通じて禅への道を求めて老人らしくない老人としての生き方をするため精神修養に専念して長寿し天命を完うする事が願望である。

第一　信用　　第二　誠実　　第三　努力

以上三つはこれまで私が座右銘として遵守して来たもの。私の跡を継ぐもの、よろしくこれを信条として家名を高め「事業は社会への奉仕である」という理念を忘れることなくこれからは知識を広く世界に求めるよう心がけてもらいたい。

私は四十年間つれそった妻梅子を亡くした。私のよりよき協力者であった梅子が、死ぬに死にきれなかったであろうと思われるのは、栄之と邦子の結婚がまだだったということである。私は亡妻への手向けとして、この二人の子供たちを早く結婚させて、そのことを墓前に告げることが何よりだと考え、私なりに努力した。幸いにして二人とも良縁を得て今では良き家庭人となっている。

「梅子よ、安らかに眠れ」この二つのことを果したあと墓前に報告した私の心境は「果し得たものの安らぎ」でさわやかだった。

余生をいかに老人として立派に生きるか。

老後の生活設計で社会奉仕の為めロータリーアンとして戸畑ロータリーの会長を七十三才から七十四才六月迄は大過なくつとめるようなす事は曩に述べた通りである私の創立した会社はなんとしても一段と発展させる事が最大の生甲斐でもあるが、此の機会に精神の修養で何時死ぬとも他に迷惑をかけぬしかも安楽往生をのぞむ欲の深さでもある。

それにつけても老人としてのこれからの生活は若ひ人と同じようにゴルフや麻雀のおつき合いも出来ず健康と心のやすらぎを何にもとめるか仲々むつかしい問題でもある。そこで曩に述べた茶の道に少しづつでも心をよせるべく茶の心に付き表千家のある雑誌の抜萃を次のように書いてあるので記述する事にした。

茶の心

（表千家のある雑誌から）

自然と人の調和

茶摘みのたより

桜の花の散る頃（ころ）から、宇治の茶畑から日々茶のたよりを聞くことになります。本年一番の茶を摘んだとか、晩霜に思いもかけぬ害をこうむって本年の茶の質はよくないとか。茶についての報道には、やはり耳は敏感といえます。

五月にはいって本格的な茶摘みがはじまるわけですが、その直前のあらあらしい四月の季節は、花を吹き、茶に降りそそいで、毎年のことながら、茶にたずさわる人々をはらはらさせます。茶にたずさわる茶業の人々も、茶の湯をたしなむわれわれにも、茶摘みの頃は何となく落着かぬ気分のものです。

五月新茶を摘みとって、むしたり干したりして、葉茶に仕上げられたのを、茶壷（つぼ）につめて保存します。この茶は秋から冬にかけての十一月頃に使いはじめられるのが昔か

らの習いです。新茶は十一月はじめの口切の頃に使いはじめます。新茶を壺に入れて保存することは、今では茶人の手元でしなくなりました。

その昔、茶臼（うす）で茶を挽（ひ）いたのも、今では大工場で大量に作られるなど、機構はかわりましたが、新茶をたくわえて夏を越し、冬をまってはじめて茶の味がよくなり、そこで呑（の）みはじめるという大本はかわらないようです。

こうした自然の味、茶の味をかこんで永い歴史のうちに組上げられて来た茶の湯ですが四季にわたって、どのような形でまとめられているのかをみましょう。

四季のたのしみ

十一月はじめ立冬をむかえる頃、茶壺の新茶をとり出し、「口切の茶」として一番改まった気分と形の茶事を催します。この頃が茶の湯の正月に当たるわけで茶の湯の一年は「口切の茶」にはじまります。濃茶と薄茶と懐石料理の組合わされた茶事で、正午にはじまる最も正式な形が「口切の茶」にみられます。

冬もふかくなると、十二月から立春二月のころまでの夜の長い季節に、夕暮れ五時ごろ

からの「夜咄（よばなし）」が催されます。

こよみの上の新年正月には初釜（はつがま）の名で、大福茶を祝うことはご承知の通りです。こよみを追って、節分の茶、初午の茶とか、上巳の節句、ひなまつりの茶とか、花が咲けば花見の茶などが行なわれます。

五月立夏をまって、炉をしめて風炉にかえ「初風炉の茶」がはじまり、夏をむかえると「朝茶」とて、六時ごろからの早朝の茶をたのしみます。

秋をむかえ、前年からの茶の残りもとぼしく、深まっていく秋のけはいは、いかにもわびたものとなり「名残の茶」の名で渋味のかった茶を催します。この「名残りの茶」が茶の一年の最後にあたり、やがてまた口切の頃をむかえるわけです。こうした名の四季に応ずる茶事のたのしみがあって、それぞれの時候に応ずる道具や点前が用意されています。

平素けいこをつまれる点前も、こうした客のもてなし方のために修練を重ねているのであり、料理をすすめ、濃茶をねり、炭をつぎ、薄茶をたて、四時間ほどの間に心ゆくばかり主人と客が静かに清らかな茶の心を味わおうというのが茶の湯の主眼なのです。こうした四季の感に追われるようにして移ってゆく茶の湯では、とりもなおさず季節感と一体な

のであって、道具にしても、道具の銘にしても、茶事の意味あいと季節にあうものをえらび、常緑の露地をわたって入席した茶室には、季節の花がかかせぬものとなっています。

なごやかな世界

近代化のすすむ街のなかに、なお出来るかぎりの自然の形をのこし、むしろ新しく自然を造りかえ、主客の交わりの人と人との間に、もの柔らかな自然をなかだちとして組入れ自然と人の一体化、人と人の調和をはかるのが、茶の湯の役割であろうかと思われます。

茶の湯はこのように四季の移りに敏感な季節感とか、一木一草、さらに名もない石にいたるまでの自然に対する愛情といったものを基として、人々の間になごやかな世界を築くことをめざしています。

そして何より大切なことは、おいしいお茶を客にもてなすことです。これには茶のたて方と茶の味の吟味をまず第一に必要としましょう。一碗（わん）の茶がおいしいためにはそれをめぐるあらゆる条件を整えて来なければなりません。それはやがて、より合う人間そのものの修練、すなわち心のありようにまで及んでくることでしょう。

こうしたところから、利休の子息の道安のことが思い出されます。父利休の茶の心をひきつぎながら、なお思うところあってか、次のような一首をのこしています。おのおの茶を志す者の心に銘ずべきことと思われ、一首をひいて稿を終わりたいと思います。

茶湯こそせぬ人もなき　手すさみの
こころのするは　世にもまれなり

孤独に徹する心構え

一、雑草一代を記した事で人間の一生は長いようで短く短いようで長い旅路でもあると考え私は老後を茶道に生き甲斐を求めたいと曩に述べている事に関連して七十才を過ぎると人間は孤独に徹する事に依り安楽往生が出来るような私の近来の心境でもあり孤独に徹しなければとの事で今日出海氏がわが人生のとき（一九七四）一〇、一五日毎日朝刊に次のような記事が掲載されている。

利休（千利休＝一五二二―九一）でも織部（古田織部＝一五四三―一六一五）でも『こころ』ということばをよく使っている。だけどもありややっぱり茶のみ話に話しているけれども彼らがそういうことを思いつくのはたった一人茶室で茶と対決したときに生れたことばだろうね。そういうものってのはいまだんだん薄くなってきたんぢゃないの。対決するものなくなっているんだよ。本当の孤独ってものはないんだな。

聖徳太子なんてそうだ独生独死、独去、独来（どんしようどくし、どくこどくらい）一人で生まれてきたんだし一人で死んでゆくんだ、また一人来たって一人また去ってゆくのだという孤独というものに徹しなければね、宗教も『こころ』の問題も出てこないじゃないかな。

おわり

雑草一代　非売品
昭和50年1月発行
編集
著者　永岡　恵
発行所　豊後高田市玉津一一二九の三
印刷所　日の丸印刷株式会社